
正義を受け継ぎし者

雅太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義を受け継ぎし者

【Zコード】

Z9796M

【作者名】

雅太郎

【あらすじ】

高町家の末っ子”高町なのは”には、大きな夢がある。それは、”大切な人を守ることが出来る正義の味方”になる事である。この夢は、高町家の居候だった青年”衛宮士郎”から、受けついだ夢だ。正義の味方を目指す魔術師見習い”高町なのは”は、ある日、”魔法”的の力を得る。（このなのはは、運動音痴ではありません。また、Fateの方でも、作者が独自の設定が入っている為、「ありえない」だろ、これ……」と、思うところがあるか知れません。そこは、大きな心で見逃して下さい……）

プロローグ1「正義」（前書き）

どうも、雅太郎です。

今回は、なのはを主人公とした物語となっています。

ただ、このなのはには、魔術回路があり（こいつは、あまりなく10本）、魔術師になっています。

ちなみに、プロローグは1～3となっていて、1はこの物語の大きなポイントであるなのはが、正義の味方になると決める話になります。

その為、色々と意味不明になってしまっていますが、お許しください。

……まじで

プロローグ1「正義」

プロローグ1「正義」

「お兄ちゃん・・・お兄ちゃん・・・・・・

一人の少女が、泣いている。

少女の名は、高町なのは。この高町家の末っ子である。

「じめんな、なのは・・・

俺はな、もう治らないんだ。これは、病氣なんかじゃないんだ。
これは、俺が昔受けた呪いなんだ・・・・

少女のすぐ傍には、一人の男性が布団の上で寝ていた。

赤色の髪に、白い髪の毛が混ざっている。肌は、少し日焼けしている位に黒くなっている。

この男性の名は、衛富士郎。高町家に居候している”魔術師”的青年である。

「ごめんね、お兄ちゃん。

私が・・・私が、もつと治療系の”魔術”ができたら・・・

なのはは、”If”的世界を夢見た。

もし、自分がもつと魔術ができていたら・・・そんな”If”を・・

・

「だめなんだよ。この呪いは、決して治らないんだ・・・

この呪いは、”この世の全ての悪”なんだ・・・・

「えつ！？？」

なのはは、”この世の全ての悪”的名を聞き驚いた。

”この世の全ての悪”とは、なのはが、愛読する本”聖杯戦争”に、
でてくる聖杯の中身だったからだ・・・

ちなみに、この”聖杯戦争”という本は、昔、士郎が記憶の整理に執筆した文庫本の事だ。

「ねえ、お兄ちゃん……嘘、だよね……」

“この世の全ての悪”なんて……」

「いや、本当なんだ。」

俺は、聖杯戦争で“この世の全ての悪”の呪いを受けたんだ。」

「そん、な……

う、うわ～～～～～～～ん・・・ひつく・・・お、お兄ちゃん

!!

なのはは、ついに泣き崩れてしまった。

士郎は、なのはの頭を、撫でてつやつた。

その様子は、まるで本当の親子のように見える。

「・・・なあ、なのはは、将来何になりたいんだ?」

「ふえ・・・ひつく・・・わ、私は・・・

私は、将来“正義の味方”に為りたい!お兄ちゃんのよつこ、みんなを助けるような正義の味方に」

「なのは、正義の味方はな、為れないんだ。
みんなを救うこととは、できないんだよ・・・」

士郎は、まるで自分に言い聞かせるように言つた。

けれど、なのはは、納得しようとしなかつた。

「それじゃあ、なのは。約束してくれ・・・

絶対に、自分を最優先にすること。絶対に、諦めないと。そして・
・・

絶対に、大切な人を見捨てないこと、できるか?」

「うん。絶対に・・・守るよ。お兄ちゃん・・・」

「そうか・・・安心した。」

士郎は、笑つていた。

普段は、あまり笑うことが無かつた士郎の満面の笑みが、そこにあつた。

「なのは、これが俺ができる最後の応援だ。
具現化開始>>トレース・オン<<」

そう言うと、士郎の胸の辺りが輝き徐々に一つの形になっていく。

それは、黄金の鞘だつた。

「お兄ちゃん、これは？」

「なのは、これはな、”全て遠き理想郷”つていう鞘だ。

これを、なのはに渡すよ。」

「アヴァ、ロン……」

なのはが、それに触れいるとなのはの中に入つていった。

「あれ、消えちゃつた？」

「大丈夫だよ、なのは。

”全て遠き理想郷”は、なのはの中にあるよ。

きっと、”全て遠き理想郷”がなのはの為になつてくれるよ

「お兄、ちゃん？」

「ごめんね、なのは。

今は、少し眠いんだ……」

「う、うん。それじゃあ、お外に出てるね……」

そう言つて、なのはは、部屋の外に行つた。

部屋に残つた士郎は、まるですぐ傍に誰かいるかのように、独り言を呴いた。

「親父、ごめんな。俺、正義の味方になれなかつたや……

でも、いいよな。俺の夢は、なのはが引き継いでくれた。

きっと、なのはなら俺たちみたいては為らない。そして、きっと俺たちが叶えられなかつた事を、

叶えるよ。

なんか安心してきた。親父も、俺が代わりに正義の味方になるつて言つた時も、この感じだつたのか？

親父、俺は、もう頑張らなくとも、いいよな？

そう言つて、士郎は目を閉じた。

ここに、一人の男の物語が終わつた。

プロローグ1「正義」（後書き）

どうも、雅太郎です。

まず先に言います。すみません。今回の話は意味不明でしたよね？
しかも、土郎死んじゃうし……

ですが、プロローグ2と3を見た後に読めば、結構解る気がします。
(まだ書いていませんが……)

という訳で、次回もお願いします。

次回「プロローグ2「折れた理想」」
お楽しみに！

プロローグ2 「折れた理想」（前書き）

遅れてしまつてすみません。

最近、此方の用事がかなり多くてついひつきませんでした…

ちなみに、土郎はF a t eルート（別名セイバールート）から来て
います。

プロローグ2「折れた理想」

プロローグ2「折れた理想」

この平行世界は、異常である。

存在しないはずの魔術師（衛宮士郎）が現れ、彼の魔術と理想を受け継いだ少女（高町なのは）がいる。

それ以前に、この世界に、なぜ”衛宮士郎”がいるのか……

それは、数年前に逆上る……

* *

side 士郎

あまりの激痛で、目が覚める。

体には、すでに再起不能とまでの傷を受けていた。

俺は、今まで正義の味方になろうとあらゆる国へ行き、争いを止めて、人々を救ってきた。

けど、俺の望む正義の味方には、なれなかつた。

多くを救うために、時には誰かを犠牲にしてしまったことだってある……

俺は、結局親父やアイツと同じになつたんだな……

啖呵切つて、親父に「俺が、なつてやるよ」と言つたのに、結局なれなかつたんだな……

「なあ、親父……」

俺は、親父が望む正義の味方にはなれなかつたや……約束したのに、果たせなくてごめんな……

でもさ、後悔も絶望もしてないんだ。正義の味方には、なれなかつたけど……

今まで、助けた人たちが笑顔を見してくれて、もう満足できた気がするんだ。

なあ、親父……俺も、もう休んでもいいかな？

俺は、独り言のように、死んだ親父に向けて語りかけた。

俺の体はもう持たないから最後くらいはこんな感じにいのもいいだろう……

例えこの像が無かったとしても、俺の魂はは“この世の全ての悪い呪い”が掛かっている。

聖杯戦争の時、
言峰との最終決戦に俺は、
”この世の全ての悪”を
浴びせられた。

”この世の全ての悪” 自体は、”全て遠き理想郷”で吹き飛ばした

が、それが”にも遠く”この世の全ての悪”が、俺の魂に叫いを掛けた為、呪いは既に、俺と一体化してしまっている。

俺は、田を開じ永遠の闇に沈むとするが、誰かが近づいてくる気配を感じ田を開く。

俺の目の前には、魔術の師匠である”遠坂凜”が立っていた。

「ほんと、久しぶりだな遠坂。」「久しぶりにわ士郎」

こつもと変わらない、遠坂を見て少しげのじを思出す。

聖杯戦争の時、出でたみんなとの思い出を……」
だけど、こつまでも昔を思い出してられない。

「彼女が、ここに来たということは、考えられるのはただ一つだ……俺の死体でも、回収して来たのか？」

「ええ、少なくともそういう設定で来てるわね。」

えつ

設定で？ってことは、遠坂は、協会や時計塔の連中を騙してまで、ここに来たのか？

そう思つてると、このまにか遠坂は、俺の田の前まで来ていた。

「まったく、わざきの独り言聞こえてたわよ。

こつけが、泣きわざになるくらいの告白だつたじやない……」

さつきのが、聞こえてしまつていて事実について顔が赤くなるのを感じてしまつ。

顔を見られなこように、背けようとするが、彼女の手でしっかりと固定されてしまつ。

「ほんと……あんたは、良く頑張つたわよ……」

「遠、坂？」

「いい、土郎。良く聞いて、

私が、あんたの魂を人形に移すわ。それで、平行世界に送つてあげるわ。

そこで、じつかりと幸せになりなさい。

どうやら、それはもう決定事項のようだ。なら、最後の最後に甘えさせてもらひつか。

「ああ、ありがとな遠坂。」

たくさんの宝石と、何処から持ち出したか解らない人形を出していく遠坂にお礼を言つ。

「別にいいわよ。お礼なんて……

その代わり、必ず幸せになるのよ。みんな、それを望んでいるんだから。」「

ああ、さつと、幸せになるよ。

「それじゃあね、土郎。大好きだつたわ……」

最後に、遠坂の告白を受けながら、俺の意識は彼方へと消えた。

* * * * *

田を覚ますと、そこは知らない天井だった。

まあ、平行世界に来たのだから、知らないのが当たり前だが、なぜ室内にいるのだろうか？

疑問をよそに、何故か入っていた布団から、起き上がりつつあると、右腕に何か重さを感じる。

確認する為に右腕の方を見てみると、そこには一人の少女が眠つていた……

（ま、待て！なんだ、この状況は！？平行世界に来ると同時に、俺はもう犯罪者か！？）

などと、混乱していると、少女が起きたらしい。

「うへへへへん、…………ふえ？」

起きると同時に、少女と田が合ひ。

少女は、こちらを見ているが、俺はどうすればいいか、わからず固まってしまう。

少女は、栗色の髪を片結びに縛つっていて、だいたい五歳から六歳くらいに見える。

俺が固まっていると、少女は、立ち上がり扉の方へ向かっていき、「おとーさん、おとこのひとおきたよ～～～！」

そう言つて、部屋の外に出て行つた。

暫くすると、さつきの少女とおおらか、少女の両親だと思われる男性と女性が入つて來た。

「君、体の調子はどうだい？」

「はい、もう大丈夫です。手当をしていただきありがとうございました。」

「別に、たいしたこと無じよ……」

つと、そう言えれば、自己紹介がまだだつたね。

僕は、高町士郎。こちが、妻の高町桃子。それで、この子が僕たちの娘の高町なのだ。

「俺は、衛富士郎って言っています。」

「それで、士郎くん？」

「はい、何ですか？」

「君は、どうやって家に現れたんだい？」

いきなし、家の庭が光ったと思ったら、君が倒れていたからね。」

そう聞き、何処まで話そつか迷つてしまつ。

けれど、なぜかこの人たちには、全てを話したくなる。

ここまで、優しい人たちに嘘は付きたくないから……

「解りました。全てお話しします。

ただ、その前に、ドアの前にいる人にも入つてきてもらつてくれださい。

俺が、そう言うと桃子さんが扉を開くと、士郎さんは氣づいていたようだ。

と、めがねを掛けた黒髪の女性が倒れこんでいた。

「恭也！美由紀！」

桃子さんは、驚いているようだが、士郎さんは氣づいていたようだ。

「士郎君、息子たちが迷惑を掛けたね。

こつちは、高町恭也で、こつちが高町美由紀だ。」

「かまいませんよ。

それじゃあ、お話しします。衛宮士郎という男のことを見つけてください。

そして、俺は今まであつたことを全て話した。

俺が、魔術師であること。別の世界からきたこと。

あの大火災に、聖杯戦争、そして正義の味方を目指して頑張つていたことを……

「…………それで、俺は遠坂のおかげで今ここにいるんです。」

俺が、最後まで言い終わると桃子さんが、俺を抱きしめてきた。

「今まで、辛い思いをしてきたのね、士郎君。」

「ああ、でももう大丈夫だ。僕は、裏の世界について詳しいが、この世界には、協会や魔術師はないよ。」

いつの間にか、俯いていた顔を起こすと、そこには涙を流しながら、俺を受け入れてくれている家族があつた。

「なあ、士郎君？」

君は、この世界で幸せを掴むんだろう？

「はい、そのつもりです。」

「なら、僕たちと、家族にならなかいか?」

「えつ?」

突然の言葉に、驚いてしまう。

「あら、土郎さんいい考え方ね」

「まあ、父さんならそう言うと思ってたが、俺は賛成だ。」

「私も、賛成だよ。もっと、いろんな話が聞きたいしね」

「しろうおにいちゃんも、なのはたちといっしょにくらすのーーー!」

「私たちは、大歓迎だが、どうだい土郎君?」

俺は、この家族たちの優しさに涙が流れてくる。

ここまで、良くしてくれるこの家族に俺は入りたくなる。
だから、俺の答えは……

「これから、よろしくお願ひします。

この家族の一員として!!」

みんな、俺はこの世界で、絶対に幸せになつてみせるよーーー!

プロローグ2「折れた理想」（後書き）

ほんと、更新が遅れてしまつてすみません。

水木と、キャンプの手伝いに行き、金は疲れで死んでました……
さて、今回はどうやつて衛富士郎がなのはの世界に来たのかがテーマとなつていますが、皆様はちゃんとご理解頂けましたでしょうか？
次回は、プロローグの最後で「プロローグ3」「ありふれた幸せ」です。

最後に、感想をくれた

天狐様、ノース様、端穂様に感謝を

プロローグ③「ありふれた幸せ」（前書き）

今回が、最後のプロローグです。

内容は、簡単に言えば無印・ASで関係する、士郎が行う行動です。ちなみに、次の本編から基本なのはが主人公です。

プロローグ③「ありふれた幸せ」

プロローグ③「ありふれた幸せ」

士郎が、高町家に来て早2年がたつた。

その間に、高町家で一つの事件が起こった。

それは、高町士郎が大怪我をした事だ。

それにより、高町桃子は、立ち上げたばかりの店”翠屋”で忙しく、高町恭也は、力の無い自分に憤慨し無茶な修行をし、高町美由紀は、できるかぎり店の手伝いをしていた。

衛宮士郎はと言うと、高町士郎を大怪我にした原因である組織を壊滅させ、治療系の魔術が使えない自分の才能に悔やんだ……

そして、高町なのは、家族に手伝いを頼んでも断られ”自分は要らない子”だと、思い込んでしまつ。

本来なら、高町なのは”良い子”を演じるようになるが、この世界では違つた。

”もう一度と誰かが傷つくのは見たくない、だから私はお兄ちゃんのように魔術師になりたい!!” そう思い、衛宮士郎に弟子入りをしたのだった。

始めは、衛宮士郎も断つていたが、結局高町なのはの頑固差に負け、魔術と武術を教えるのだった。

それから数日経ち、高町士郎にやっと回復の兆しがあつた為、高町家には安心が生まれたのだった。

そして、高町士郎は退院すると、同時に裏から抜け翠屋の店長になつたのだった。

高町なのは、その事件以降も魔術と武術を習つていたのだった。

（あの悪夢とも思えた事件から、もう2年も立ったんだな……）
俺は、そんな事を考えながら、海鳴市にある桜台といふ所に向かっていた。

理由は、なほにそろそろ結界を見破る試験を行う為だ。

試験内容は、機台の近くは縦界を張るのでそこを見に行く事が
ちなみに、その基点となる所には、ある物を埋めておく。それを見
つける事も、試験内容の一つだ。

つと、考え事をしている内に、もう桜台に着いたな。
そこから、茂みの少し奥の所にこれを埋めて、ここにある靈脈から
魔力を吸い取るタイプの結界を張つてつと、これでよし！
さて、それじゃあ戻りますか。

— ८ —

—
h?
—

桜台から、高町家に帰つている途中、どこからか唸り声が聞こえた。辺りを見回してみると、車椅子の少女が溝に挟まつた車輪取ろうと悪戦苦闘していた。

とな。

俺は、少女に近づき車椅子を軽く持ち上げて、溝から外した。

一九、おおむね二〇

「別にいいよ。当然の事したまでだし。」

「当然ゆーても、お兄さん以外誰も助けてくれへんかったよ？」

「はは、俺にとつては当然の事なんだよ。それで、何処に行くんだ？」

「えつ？えつと、本屋に行くんです。ちょうど今日、予約してた本が届いたんやけど……」

「俺が、押してくれよ。また溝に嵌るといけないし。」

「あ、あれはたまたまやーいつもなら、嵌らへん！……」

そういうて、顔を赤くしながら怒る少女を見て、つい笑ってしまう。この子を、からかつてると、アーチャーの奴が遠坂をからかうのも解るな。

「そやーうちは、八神はやでいいます。お兄さんは？」

「俺は、衛富士郎っていうんだ。」

「衛富士郎？あれ、なんか聞いたことがあるよつな……」

そのまま、はやてと談笑しながら歩き、本屋に着くとレジまで連れて行く。

「あの、予約をした八神はやでなんですか？」

「八神さんですね？予約した本は、こちりでしちうか？」

「ブツ……！」

はやてが、予約したと思われる本を見て思わず吹いてしまつ。なんで、その本なんだよ……！」

「あ、はい。そうです。」

「は、はやは、意外と伝記関係の本を、読むんだな……」

「はいーうち、このシリーズの本大好きなんやー！この”聖杯戦争”は、上・中・下の三弾になつてて、今回でやつと完結なんやでー！」

「！」

そう、はやてが予約してた本は、俺が執筆した本だ。

翠屋が、それほど人気が無かつ頃に、なんとか稼いでみんなを楽させたいと思って、考え付いたのが、俺が巻き込まれた第5次聖杯戦争を、小説化することだった。

本来なら、魔術協会などが許すわけないが、ここは平行世界。士郎さんから、この世界に魔術師がないことが解つたからこそできた

んだ。

「そういう、この物語に出てくる主人公も作者も”衛宮士郎”やつたな？」

あ、なんか甘はそくなよかんか

「士郎さん、なんか隣係あるんか？」

「いや、ないぞ！ まつたく、全然……」

「…………そういうや、士郎さんが、バーサーカーを倒した剣つてなや

「あれは、”勝利すべき黄金の剣”だったな。…………つて、あ

なんだか、はやてが笑顔なのになんか、恐ろしい雰囲気なんだが……
「土郎さん、お話をしようか？」

「またくちやんと話してくれたひすく許したんよ?」

「す、すまん、はやて……」

おれがさう近くにゐるからやつての家に連れて行かれて、何分も聞い

「たゞ、まだが憧れの小説家さんにあるとほ、感激やまあ、こんなに喜んでくれるな」いつか。

つて、そろそろ夕飯の手伝いしないと行けない時間だ！！

「すまん、はやて。俺、そろそろ帰りなこと……」

「え~~~~~、もう歸つてまうんか~~~~~」

「ねやで、これやるからねーー。」

「なんや、これ？」

俺は、ポケットから“お守り”を取り出す。

「これは、俺が昔友人からもらったイヤリングでな、クーフーリン
がつけてたって言う物だ！！」

「えっ、そ、そ、そ、そ、そないや大切なもん貰えへんよーー！」

そう、これは、昔バゼットからもらつたものだ。

あの時、バゼットが本来もアイツのマスターと知つた時に、バゼッ
トから貰い受けた物だ。

「いいんだ。貰ってくれ」

「う、うん。ありがとう…………」

にしても、イヤリングじゃあまだ早いか…………ならーー！

「ちょっと待つてろ…………これでよし！」

「ほんまにありがと～土郎さん」

イヤリングの先端辺りに軽く穴を開け、そこに紐を通してネックレ
ス状にしてはやてに渡した。

「それじゃ、また会おうな

「うん、またな」

軽く挨拶をしてから、俺は高町家に帰つていった。

それからは、いつも通り夕飯の手伝いをし、なのはの修行をし、風
呂に入つて寝た。

プロローグ③「ありふれた幸せ」（後書き）

今回は、無印とASでとても重要なイベントがある回でした。
もしかしたら、感のいい人は、何があるか分かつてしまうかも知れません

それに、常に戦場にいた士郎にとって、ありふれた日常とは幸せな物なのでこんなサブタイトルとなりました
最後に感想をくれた

TOMOKICHI 様に感謝を

第一話「高町なのは」（前書き）

プロローグも終わってやっと本編の開始です。
本編は、プロローグ1から約1年後です。

第一話「高町なのは」

第一話「高町なのは」

『誰かこの声が聞こえる誰か……』

薄暗い森の中で、一人の男の子が倒れています。

男の子は、動物に変身しながら、助けを求めていました。

私は、助けに行きたい！けど、これは夢。私は、動くことは出来ない……

『お願い……力を貸して……魔法の力を……』

えっ！！ま、魔法！？魔法は、五つしか無いのに……

そんな疑問も解ける事無く私は、夢から覚めた。

「変な夢……」

それが、私が見た夢の感想でした。

私、高町なのは！小学3年生です！！

私の家に居候してた士郎お兄ちゃんが死んじゃってから、もう一年経ちました。

あの時は、私はただ泣くことしかできませんでした……

何日も部屋に籠つて泣いていて……

でも！もう大丈夫です！！私は、絶対に士郎お兄ちゃんから受け継いだ理想と力で頑張つていきます！

そんな訳で、今は日課の朝のランニングの途中なんですが……頭の中にあるのは、さっきの夢のことです。

あの男の子は、”魔法”って言つてたけど、よくよく考えてみたら、この世界に”魔術”はありませんから、この世界には独自の魔術体系があつて、それがさつき言つてた”魔法”なのかな？

もしそうなら、魔術使いとしてくつぽいだけど、この世界の魔法なら、素質あるかな？

やつがえりのつかひ、もつ我が家にひこてしまひました。

一、政治小説

「あら、おまえがやうなのよ。今田は早かつたわね。」

リビングに行くと、キッチンの方でお母さんが、ご飯を作つてしまつた。

早かつたのかな?なら、もう少し距離を伸ばしてみようかな?
あー!にやはは、忘れるといだつた。

おはよう、士郎お兄ちゃん

わう艦にて、ラジオで立候るトーフルの上に眞に挨拶します

忘れないように、いつも挨拶をしています。

これが、私のいつもの朝です。

* * * * *

「ねえ、なのは？なのははまだ、正義に味方を目指してるの？」
学校が終わって、塾に向かってる途中に、私の友達の”アリサ・バニングス”ちゃんが、そう聞いてきました。もちろん私の答えは、決まっています。

「うん。やだよ、アリサちゃん。」

「なんと言つが、ホント男子みたいな夢ね……」

む――失礼な、
のはは女の子だよ。

一 も、素敵な夢だと想ひながらまかん

を「言つてくられたのか
私のも「一人の友達」戸村すすか
」ちやん

「ま、それは認めるわね。友達や家族を守る正義の味方なんでしょう、なのは?」

「うん、やうだよ。」

その後、世間話をしながら歩いてると、アリサちゃんが塾への近道になるという道を歩いてると、何故か見覚えがあるように見えます。そう思いながら、歩いていると、夢に出てきた声がまた聞こえました。

『助けて!!!』

その声を聞いた瞬間、私は駆け出してました。アリサちゃんとすずかちゃんが、驚いてるけど、それでも私は走りました。

その声の主を、探しながら走つてると、一匹の動物さんが倒れているのが見えました。

傷ついた動物さんを見ていると、その動物さんが目を覚ました。私が、動物さんを抱きあげると、ちゅうびアリサちゃんたちが来ました。

「ちゅうと、なのは。じりしたのよ急に走り出しちゃ~」

「あー見て、動物。怪我してるみたい……」

「う、うん。どうしよう~?」

「どうしようつて……とりあえず病院?」

「獣医さんだよ。」

「え~つと、この近くに獣医さんつてあつたっけ?」

「え~つと、この辺りだと確か……」

「待つて、家に電話してみる。」

* * * * *

「「「ありがとうございます」「」」

あれから、私たちは槇原動物病院に行きました。

獣医さんに見てもらつたし、もう大丈夫だよね?

「先生、これフーレットですよね?どこかのペットなんでしょうか

？」

「フーレット、なのかな？見たこと無い種類だけど…それに、この子が着けている宝石かしら？」

先生が、フーレットさんの着いてる宝石に触らうとするとい、フーレットさんが目を覚ました。

知らない場所だからか、すこし辺りを見回しています。

アリサちゃん、すずかちゃんを見た後なのはの事を見てています。

「見てる……」

なのはが、手を伸ばして触つて見るとフーレットさんが私の指を舐めてくれました！

なのはは、つい嬉しくなつてしましましたが動いたからか、気絶してしまいました。

けど、さつきから、この子から魔力を感じるのは何でだろ？

時間を見ると、そろそろ塾の時間なので院長先生にお礼をいって塾に行きましたが、

ずっと、あの子から魔力がある事について考えてました……

第一話「高町なのは」（後書き）

ついに、本編が始まりました！！

ついついこっちの方が人気なもんでもう一つの話も忘れがちになってしまいます。

ちなみに、なのはの一人称が変わるのは仕様です。

基本、私で、嬉しい時や楽しい時はなのはになります。

最後に、感想をくれた

普通様、ジョーン様、ブラスト様、偽善者と書き道化様、天狐様あり

がどうぞ

天狐様は、二回目の感想ありがとうございます！

第一話「魔法と魔術」（前書き）

投稿が遅れてしまいすみませんでした！－

正直、変なところで切つてしまつてどう展開すればいいか、わかりませんでした

それと、今回初の戦闘シーンです！

それと、誤字があったので訂正しておきました。

第一話「魔法と魔術」

第一話「魔法と魔術」

私は、今日の夕御飯の時に、皆にフェレット君について話しました。普通のフェレット君ならただ飼つていいか?と聞くだけでしたが、あのフェレット君には魔力を感じた事も話しました。もしかしたら、この世界に私以外にも魔術師がいるかもしれない、またこの世界独自の魔術があるかもしれないという結論が、話し合った結果です。

もし、士郎お兄ちゃんがいたらどう考えるんだろう?そう考えてしました……

じゃなくて!とにかく、フェレット君に関しては、家で様子見ということで飼える事になりました。

それを、アリサちゃんとすずかちゃんにメールしてから、私は家にある土蔵に向きました。

土蔵は、お父さんが士郎お兄ちゃんの為に造つたんです!!!

今では、士郎お兄ちゃんの遺品などが置いてありますけど、私はいつもそこで魔術の特訓をしています。

それで、特訓をしようとしたら、急に変な感じに襲われました。感覚としては、魔術を使う感覚に似ています。

なので、魔術を使う時のように心を澄まし、自分の中にある回路を確認しますが、まったく起動しません、なのでこの感覚の原因は私自身に無いとわかりました。

そうしている内に、昼間の時と同じ声ががしました。

もしかして、あのフェレット君なのかな?

何か切羽詰つてる感じだったけど、何かあったのかな?

そう考えた私は、士郎お兄ちゃんが残したコート状の聖骸布を羽織、

駆け出しました。

* * * * * * * * * * * * * * * *

夜道を、身体強化して走り、槇原動物病院に着きました。
そうすると、またあの変な感覚になりました。

魔術で、少し慣れてるけど、思わず耳を塞ぎそうになってしま
した。

すると、中から獣の様な呻き声がしました。

中に入ろうとすると、ちょうどフェレット君が窓から飛び出して来
ました。

けど、フェレット君を追つて、化け物の様な物も飛び出してきまし
た。

おそらく、フェレット君はあれに襲われているのだろうと考え、私
に向かって来たフェレット君を受け止めました。

「来て……くれたの？」

「喋った！やつぱり、君つて魔術とか関係してるの？」

私が、そのまま質問しようとするけど、あの化け物が起き上がった
ので、逃げることにしました。

なぜ戦わないのか？だつて、ここで戦つたら、槇原動物病院が壊れ
ちゃいそうです……

せめて、広い公園まで逃げるために走ります。

すると、フェレット君が話しかけてきます。

「君には資質がある……お願い、僕に力を貸して！」

「資質？」

魔術のことかな？

「僕はある探し物の為に、ここではない世界から來ました！
でも、僕一人の力では、思いを遂げられないかも知れない。

だから……迷惑だと分かっているんですが、資質を持った人に協力

して欲しくて……」

ここではない世界つて、もしかして平行世界のことかな……
そう考へてると、フェレット君が飛び降りました。

「御礼はします……必ずします！」

僕の力を、あなたに使つて欲しいんです。

僕の力…………魔法の力を！！」

「えつーま、魔法！ 魔術じゃなくて！！」

「えつ！ 魔術つて、魔法とは違うんですか？」

うん、なんか分かつちやつた……

たぶん、この子のいう魔法つて、私のつてる魔法じゃ無いみたい。
そう考へてると、あの化け物が襲い掛かつてきました。

「うわ～～～～」

フェレット君は、突然のことで驚いてるみたいです。

私は、左足を軸に、体を90度回転させ、そのままバックステップで避けて、

「トース・オン
投影開始！」

十本ある魔術回路のうち、一本だけ起動させます。

私の両手には、一本の剣が握られます。

剣の名前は、干将・莫耶。中国に伝わる夫婦剣で、土郎お兄ちゃんが、愛用してた剣です。

本来、投影魔術は一から十まで魔術で再現するけど、再現出来た物は幻想。

世界の修正され、存在でいて数分しか出来ないらしい。

けど、私や士郎お兄ちゃんは違う！

士郎お兄ちゃんは、何でかわからないけど、

私は、私の魔術の属性のおかげです。

私の属性は、”変換”。士郎お兄ちゃんのような異端の属性です。

名前道理、魔力を何かに変えることに関しても属性で、私はこの属性で、投影したものを幻想ではなく、ちゃんととした物として再現できるので、壊れるか投影破棄しないかぎり、永久的に残すことが

出来ます。

それはさて置き、バッグステップで紙一重でよけた私は、そのまま右手を強化しつつ右手で持った干将で、化け物を切り裂きました。結構硬いと思ってたけど、あっさりと切れたので驚きました。

「あなたは、一体……じゃなくて！」

あの、それはある物が作り出した幻影のような物です。

物理的なダメージでは、回復してしまいます。」「

「じゃあ、どうすればいいの？」

「これを！」「..!」

そう言って、フェレット君は自分の首に掛かってた宝石を差し出してきます。

投影を破棄して手に取ると、なにやら暖かい感じがします。

「それを手に、目を閉じて、心を済ませて、僕の言つとおりに繰り返して！！！」

「う、うん！」

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に…」

「風は空に、星は天に…」

「そして、不屈の心は・・・・・」

「そして、不屈の心は・・・・・」

「「この胸に！！！」

「「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ！..！」

『スタンバイ、レディ、セットアップ』

宝石から、光が溢れ空に伸びていきました。

「な、なんて魔力だ……そ、そんなことより！」

落ち着いてイメージして！君の魔法を制御する魔法の杖の姿を！

そして、君の身を守る強い衣服の姿を！」「

「そ、そんなこと、急に言われても………とりあえずこれ…」

私の周りに、桜色の光が現れ、私を包みます。

「成功だ！」

光が無くなると、私の服が変わつてました。
服が、白いワンピース型の服に変わました。ただ、魔力遮断を持つ
聖骸布は残つてます。

手には、柄がピンク色で、先端には金色の装飾にそれに守られるよ
うに赤い宝石がついた杖があります。

「えへへへへへ！」

いくら、魔術を知つていてももう限界です。

私は、いきなりのことについ叫んでしまいました

それと同時に、さつきの化け物が回復し終わつたみたいで。

けど、さつきの様に返り討ちに遭わないように距離をとつています。

「僕らの魔法は、発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式で
す。

そして、その方式を発動させる為に必要なのは術者の精神エネルギー
一です。

そしてあれは、忌まわしき力が元に生み出された思念体。

あれを、止める為には封印して元の姿に戻さなきゃいけないんです。

「えつつとーーー、わからないんですけど、どうすれば………」

「攻撃や防御などの基本魔法は心に願うだけで発動します。

けど、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要何です。」

聞いてて、やつぱりこっちの魔術と大きく違うことを実感させられ
ます。

「呪文？」

「そう、心を済ませて。心中にあなたの呪文が浮かぶはずです。」

私は、その言葉道理に心を済ませます。

そうすると、一つの言葉が浮かびます

私は、レイジングハートを構えます。

それと、同時に化け物が何かに気づいたのか逃げようとしてますが、遅いです。

「リリカルマジカル……封印すべきは彫まわしき器、ジュエルシード封印！」

『シーリングモード、セットアップ』

レイジングハートも先端が変わり、桜色の翼が出てきました。

そして、レイジングハートからでる桜色のリボンが化け物を包みました。

『スタンバイ、レディ』

「ジュエルシード、シリアル21、封印！」

『シーリング』

更に出る桜色のリボンが、化け物を完全に包みます。すると、中から化け物の代わり青い宝石が出てきます。

「これが、ジュエルシードです。レイジングハートで触れてみてください。」

「う、うん。」

私は、フェレット君の言つ通りにレイジングハートで触れてみると、青い宝石が先端にある赤い宝石のようなどころに入つていきました。それで終わつたのか、私の服装が元に戻り、レイジングハートも元の宝石に戻りました。

「終わったの？」

「はい、ありがとうございます。……あなたのおかげで大きな、被害は……」

そう言つて、フェレット君は氣絶してしまいました。

この日、私はただの落ちこぼれ魔術使いから、”魔導術師”になりました。

第一話「魔法と魔術」（後書き）

今回は、なのはの魔術について色々とでています。

変換の属性は、実はまだ色々使い道がありますが、なのはは気づいてません。

ちなみに、なのはの近接での戦闘能力は、投影ありで美由記さんと互角に戦えます

なのはの投影は、宝具クラスでは干将・莫耶しか投影できず、後は普通の刀剣類や槍、など一般的な武器とカレンの持つ”マグダラの聖骸布”くらいです。

最後に、感想をくれた

アルテリア様、JIN様に感謝を

第三話「協力」（前書き）

せめて一週間に一回は、投稿するつもりです。
後、今回はなのはが協力する様を書くので短めです。

第三話「協力」

第三話「協力」

あれから、私とユーノ君（名前は、帰つてる途中で聞きました）と家に帰り、家族の皆と話し合つことにしました。

「ふむ、それでユーノ君……だつたか。

なのはの話によると、化け物に襲われたんだつてね。」

「は、はい。

それは、ジュエルシードと呼ばれるロストロギアが、作り出した思念体です。」

今は、家族会議中なんです。

「ねえユーノ君？ ロストロギアって何？」

お姉ちゃんが、質問すると、皆が頷いてます。

「えつと……実は、この地球という世界以外にも世界があつて、それらの世界をまとめて次元世界つていうんですねが、その世界内で技術や科学、進化しそぎたらそれが自分達の世界を滅ぼしてしまって、その後に取り残された危険な技術の遺産の事を、ロストロギアっていいます。」

「一ついいか？」

「あ、はい。何ですか、恭也さん。」

「次元世界というのは、平行世界と違つのか？」

「平行世界？ それは、一体なんですか？」

「えつとね、簡単に言うともしかしたらの世界なの。」

例えば、今この場にユーノ君がいなかつたり、私たちがいなかつたりそれに……死んだ士郎お兄ちゃんがいる、みたいな世界の事なの……

魔術関連には、私が一番詳しいから、平行世界の説明はなのはがしました。

ただ、やっぱり平行世界の事を考えると、士郎お兄ちゃんが生きてる世界の事を考えちゃいます……

「そ、そんな世界があるんですか！？？」

「ええ、なのはの魔術だつて並行世界によるものだからね。」

「魔術？」

「これの事だよ。

トースオン

”投影開始”

そう言い、ユーノ君に小太刀を投影して見せました。

「これが、魔術……」

「あははは、ただ、なのははへつぽじだから後は、強化の魔術しか使えないんだ……」

「それで、ユーノ君はこれからどうするんだい？」

話が、脱線してしまってたのをお父さんが戻してくれました。そうです！本題は、これからどうするかです。

「今回の件は、僕がジュエルシードを発掘したのが原因です。だから、魔力が回復したら僕一人で探しに行きます……」

「それで、またボロボロになるのかい？」

「お父さん……！」

いくらお父さんでも、その発言は酷いです。

「そ、それは……」

「…………なのはは、どうするんだい？」

「私は、ユーノ君を手伝いたい！」

このままほつといたら、お父さん達にも被害があるかもしれないから……」

「そ、…………か、ユーノ君なのはを手伝わせて貰えないかい？」

「（お）父さん……？」 「あなた……？」

「なのはは、士郎君を見て育ったんだ。

絶対に折れないくらい分かるだろ？」

「…………」

そういうと、お母さん達も納得してくれました。

「で、どうだいユーノ君？」

「えっと、本当にいいんですか？」

「うん！」

こつして、ユーノ君は高町家に居候して、私はユーノ君のお手伝いをすることになりました。

第三話「協力」（後書き）

今回は、高町家の家族会議として、
なのはが手伝う事が公認されました。

ちなみに、魔術の存在を知つてるのは、高町家とすづかに忍、ファン
リンにノエル、アリサとなっています。

特に、アリサはとある事情での某スターが使う赤い布には恐怖
心があります。

それについては、おいおい書くつもりです。

最後に感想をくれた

煌焰様、ノース様、偽善＝人の持つる最高の正義様、JINE様、
黒い鳥様

ありがとうございます。

特に、ノース様は一度、JINE様は三度も感想をください
誠にありがとうございます！！

第四話「遭遇」（前書き）

今回は、フロイトとの遭遇まで飛びます。
手抜きとか言わないで！！

このなのはは、魔術が元から使える分、魔法慣れして序盤は簡単に
おわちやうからーー！

第四話「遭遇」

第四話「遭遇」

ジュエルシードを回収し始めてから、数日経ちました。

魔法を使えるようになった次の日には、アリサちゃんとすずかちゃんには何が起きてるかは話してあります。だって、アリサちゃんもすずかちゃんも魔法を知ってるんです。

実は、アリサちゃんが聖杯戦争上巻を読んだとき、何で士郎お兄ちゃんと、主人公の士郎さんの名前が一緒に問い合わせられた時、つい口が滑っちゃったの……。その時は、すずかちゃんも一緒にいたから、すずかちゃんも知っちゃったの……。それで、一人には魔術的なことで困った時なんかは、相談に乗ってくれるって言つてくれましたからな。

ジュエルシードも、犬さんに取り付いたのと戦つた時は、起動させるパスワード?を忘れちゃつて危なかつたけど、レイジングハートが、自分から起動して助かったの。

他にも、学校の校庭で出てきたり、男の子が持つてて宝石(投影品)と交換して貰つたりと、わりと頑張つてます!

それに、明日はすずかちゃんのお家のお茶会に誘われてます。明日が、待ち待ち遠しいな〜〜

side ???

私は、今、魔力反応があつた海鳴市の桜台といつていろいろいいます。私は、海鳴市には、ロストロギアであるジュエルシードを探しに着てます。

この桜台には、なんらかの魔力反応があつたから着たけれど、今のところ、ただ魔力が多くあるだけで

ジュエルシードは、一向に見つかりません。

「バルディッシュュ！」

『イエツサー』

私のデバイス”バルディッシュュ”に、辺りに魔力を流して、強制発動させようとするけど、なにも変化がありません。やつぱり、ここには無いのか。そう考え、この場所を後にしようとすると、真下から大きな魔力反応を感じました。

バルディッシュュを、下に向け確認すると、私が今立ってる地面が赤く光で線を描いてました。
あまりの事で、私は呆然としていると、赤い線が一つの魔方陣を描きました。

そして、魔方陣が大きな光を放ちます。
私は、思わず目を瞑つてしまいました。

光が止み、目を開いてみると、さつきの魔法陣が消えています。その代わりに、私の魔力が大分減つてました。
何が起こったか確認しようと思ったら、いきなり右手に強烈な痛みが起こります。

それと同時に、私の後ろの茂みに何かが落ちた音がします。
私が痛みに耐えながら、後ろを見ると、そこには一人の男性がいました。

side out

side なのは

私は、今すずかちゃんのお茶会に御呼ばれしています！

このお茶会も、すずかちゃんが私が最近、魔術関連の事で、忙しいからと休憩として、企画してくれました。なので、今は思いつきり楽しめます。

「にしても、まさかなのはが、魔術使いから魔法少女になるなんて、士郎が知つたら、どんな顔をするのか見てみたいわね。」

「そうだね。アリサちゃん。士郎さんの事だから、どんな風に思つて見てみたいかも……」

「うーーーん……士郎お兄ちゃんは、なんか魔法少女に対して、嫌な思い出がある見たいだけどどう思うか、知つてみたいかも？」

私たちの会話では、よく士郎お兄ちゃんの話題が多いです。だって、私たちが今ここで、こんなに仲良くしてられるのも士郎お兄ちゃんのおかげだからです。

私たちが、一年生だつた頃、アリサちゃんがすずかちゃんの力チュー・シャを取つて、いじめてた事がありました。その時、私がアリサちゃんの頬を叩いちやつて、大喧嘩になつた事があります。

その喧嘩を止めてくれたのが士郎お兄ちゃんでした。

私たちが、取つ組み合つている時、士郎お兄ちゃんがちょうど私の忘れたお弁当を届けに来たんです。

その時に、すずかちゃんに止めてもうつようく頼まれたそうです。

士郎お兄ちゃんは、懐から投影した”マグダラの聖骸布×2”を、布槍術の要領で飛ばし、私とアリサちゃんを包んだんです。マグダラの聖骸布は、女性には効かないからと、強化の魔術で大幅に強化してあつたんです。それから、落ち着かせてたら解放し話し合わせて、また喧嘩し始めたら、聖骸布で赤い芋虫へのループでした。そのおかげで、私たちは仲良しになれたんですけど、アリサちゃんが聖骸布にトラウマを持つてしまいました……

そんな事を、思い出してみると、ジュエルシードが発動した感じがします！

「いめんね、アリサちゃんすずかちゃん。お仕事、出来ちゃった。」

「行こうー！なのはー！」

二人に一言謝つて、私は走り出します。
後ろでは、一人が応援してくれています。

私は、応援を背に、すずかちゃんのお家の森の中へ走っていきます。

side out

「猫、だよね？」

「うん、猫だね」

なのはは、ユーノと共にジュエルシードを確保しようと勢い込んでいたが、そこに待ち構えていたのは、ジュエルシードの力で、巨大化した猫だった。

ユーノは、なのはたちが、話している間に猫たちに食べられそうになっていた為、巨大な猫を見て震えている。

「と、とりあえず、早く封印しちゃうか」

なのはは、そう呟くとレイジングハートをシーリングモードにする。だが、それよりも早く金色の光が猫に突き刺さった。

放たれた方向を向くと、そこには黒いレオタードとマントを着た金色の髪の少女がいた。

「フォトンランサー、連撃」

少女は、新たな魔法を展開する。

そこから、また複数の魔力弾が猫に当たる。

なのはは、守る為に飛行魔法・・・フライヤーフィンを発動し、猫の前まで飛び、ワイヤードエリヤプロテクションを張つて防ぐ。

side out

side なのは

「同系統の魔導師……ロストロギアの探索者か。」

木の枝に乗っている女の子が、そう呟きました。

つまり、この子も私と同じ魔法使いだとわかります。

「間違いない！僕と同じ世界の住人。そして、この子も……ジユエルシードの探索者？」

「バルディッシュと同型のインテリショングデバイス？」

「バル……ディッシュ？」

あの子の杖の名前なのかな？

でも、同じ探索者でも私は負けない……

けど、なんであの子はあんなに悲しそうな顔をしてるの？

「それは、もういいきます。」

あの子が、そう言つと、さつきと同じ魔法を連続で撃つてきます。

私は、さつきのよつと^{トレス・オン}プロテクションで防ぎます。けど、

「いや～～～～！」

突然猫さんが、鳴きそちらに注意が行つてします。

あの子は、それを好気に思つたのか、一気に接近してきて、鎌の状態にした杖で切り裂こうとしてきます。けど……

「”投影開始！”」

私は、一本だけ魔術回路を使い干将だけを投影します。

レイジングハートを左手で持ち、干将を右手で持ちます。

そして、あの子の鎌状の杖を干将で弾きます。

「なっ！！！」

さすがに、隙を突いたのに弾かれるとほ、思つてなかつたようです。でも、これが私の戦い方！士郎お兄ちゃんのように”わざと”隙をうまく作れないと、カウンターならできます。

あの子が、驚いている間に干将を突きつけられば私の勝ちです！

そして、私は - - - - -

- - - - - 全力で、地面まで飛びました。

さつきまで、いたところを見ると、そこには3本の矢が通り抜けてました。

直感で、動かなかつたら危なかつた！

私が、矢を放つた人物を見ると、私は驚きのあまり動けません。だつて！

「ふむ、殺氣を殺しきれなかつた私の未熟か、それとも彼女の探知能力が上だつたか……」

まあいい、フェイト！戦場で、驚き、動きを止めるなど、早死にするぞ！」

「「「ごめん。」アーチャー」助かつたよ。」

だつて、そこにいたのは、遠坂 凜さんのサーヴァントだった、最後まで真名が解らなかつたアーチャーさんが、いたからです。

第四話「遭遇」（後書き）

ついに、サーヴァント登場！

最初のサーヴァントは、アーチャーです！

【クラス】アーチャー

【マスター】フェイド？

【真名】？？？

【宝具】？？？

今のところ、なのはが得た情報はこれ位です。情報を得たり、サーヴァントが出るたびに、この紹介を書いていきます！

最後に感想をくれた

TOMOKICHI 様、JIN 様ありがとうございます！

TOMOKICHI 様は、2回目の感想ありがとうございます！

JIN 様は、いつも感想ありがとうございます！！

第五話「正義の味方（見嗣）VS 錬鉄の騎士」（前書き）

お久しぶりです！

ついに、なのは対アーチャーです！！

なのはは、どこまでアーチャーと戦えるでしょうか…？

第五話「正義の味方（見習い）VS 錬鉄の騎士」

の騎士」

第五話「正義の味方（見習い）VS 錬鉄

私は、未だに呆然としています。

「フェイト！ こは、私が彼女の足止めをする…

今のうちに、ジュエルシードを封印してこい…！」

「うん！ アーチャー、気を付けてね…！」

なんで、この世界にサー・ヴァントが居るの…！

この世界に、聖杯は無いはずだよ…！

でも、現にここにアーチャーさんが居る。

なら、私はアーチャーさんを倒すしかない！

「さて、フェイトも向こうに行つたな…」

君、なぜ”魔術が無い”世界で、魔術を使つている？

「”第二魔法”、と言えば、解りますか？」

「……成程、どこかの馬鹿な魔術師が、君に教えたのか。
さて、私の役目は、君の足止めだ。全力でこい！ さすれば、この身
に、届くかも知れんぞ？」

「ま、待つてください！」

貴方たちは、なぜジュエルシードを集めてるんですか！？
あれは、危険な物なんです！」

アーチャーさんとのお話も一通りも終わると、ユーノ君がアーチャーさん達の目的を聞きます。

でも…

「ふむ、ここにも、まだ喋れる動物……いや、ここには使い魔か？
使い魔は、ほとんどが喋れるみたいだな。」

「ユーノ君は、使い魔じゃありません！」

私の友達です!!!!」

そう言い放つて、私はレイジングハートをユーノ君に向かつて投げます。

「なのは！？」

『マスター！？』

「『めんね、レイジングハート……』

アーチャーさんは、私たちより…………ううん、この中で一番強い！

なら、1%でも勝てるように私が一番慣れてる戦い方じゃないと……
トレー・スオ

”投影開始”……

私は、そう言つて空いた左手に莫耶を投影して、アーチャーさんに向かつて走り出します。

「やはり、投影魔術か……

それに、私のようなサー・ヴァントについても、知つてゐようだな。
そう言つて、アーチャーさんは、持っていた黒い弓を消して、私と同じ、夫婦剣・干将莫耶を出してきました。

(アーチャーさんは、やつぱり干将莫耶を使ってた英雄なのかな?
それとも、私や士郎お兄ちゃんと同じなのかな?)

考えながらも、私は干将莫耶で切り下ろす様に、振りります。

アーチャーさんは、逆に切り上げる様に、振るのが見えました。
そして、二つの干将莫耶が、ぶつかり合つた瞬間――――――

「はあ――」

「――？」

――――――私の投影した、干将莫耶だけが、碎け散りました。

え、な、なんで！？

「どうやら、骨子が安定していないな。

それではまだ、子供だましの域だよ！？」

今度は、左手で持つてある莫耶のみを振るのが見えます。

私は、急いでまた干将莫耶を投影し、二つを盾のように持ちます。

「ふつ――」

「くつ！！」

ぶつかり合つと、私は吹き飛ばされました。

しかも、干将莫耶には、大きな輝が入っています。

（力の差が、違います！）

輝のつた、干将莫耶の投影を破棄し、今度は、飛び道具のクナイを親指以外の指に挟むように六本投影します。

「これなら！」

新たに投影したクナイをアーチャーさんに投げつけます。でも、予想通り簡単に弾かれたり、避けられます。でも、骨子を安定させるくらいの時間は稼げた！

「”投影開始”！」

骨子をさつきよりも安定させた、干将莫耶をアーチャーさんに向かって投げます。が、簡単に弾かれてしまいます。でも、

「もう一回！”投影開始”！！」

さらに、投影した干将莫耶をもう一度、投げますが、また弾かれます。

でも、これで準備は整つた！

「！成程、狙いは”鶴翼三連”か。」

”鶴翼三連”は、士郎お兄ちゃんが考えたオリジナル何でアーチャーさんが知ってるの！？

それに、私の狙いは”鶴翼三連”じゃないの！！

「はあああああああ！！」

私は、足を全力で強化して、全速力で走ります。その途中で、また干将莫耶を投影します。

「甘い！」

アーチャーさんが、切り下ろす様に振った干将莫耶を、私の干将莫耶で防ぐよつに振ります。

そして、一本がぶつかり合つ直前に、私は……

トーストアウト

”投影破棄”！！

「なつ！！！」

持つてる投影を破棄して消します。

普通なら、このまま行けばアーチャーさんの干将莫耶が、そのまま私を切り裂きます。

そう、”普通”なら。

私は、体を地面すれすれまで低くして、アーチャーさんの真横を通り抜け、後ろに回ります。

私の強化した足なら、ほんの一瞬さえあれば、通り抜けることが可能です。

……もつとも、魔力の大半を失うけど。

私は、驚きできた隙を逃す前に、最後の魔力を振り絞つて新たに干将莫耶を投影します。

「くつ……なに！？」

アーチャーさんが、こちらに振り向き反撃しようとしているけど、それも私の計算のうちです！

アーチャーさんが、反撃しようとしても、私がさつき投げ、弾かせた二対の干将莫耶が、アーチャーさんの反撃の邪魔をします。その間に、両腕を、最大まで強化します。

これが、私のオリジナルの技！

「”鶴翼四連”！！！」

私は、アーチャーさんに向かって、干将莫耶を振りぬき、吹き飛ばします。

私は、魔術回路での魔力が尽きてしまい、その場に膝をついてします。

「なのは！」

『マスター！』

ユーノ君が、宝石に戻ったレイジングハートを持って（咥えて？）こっちに走ってきます。

でも、まだアーチャーさんは、倒せてない！！

「やれやれ、まさかあんな使い方をするとは思わなかつたな。」

さつきの、攻撃じやダメージも負わせられなかつたなんて……

「だが、忘れてないか？

私の役目は、足止めだ。いくら、私を倒そうと奮闘しても、本来の目的を果たさなければ意味が無いぞ？」

！！！

アーチャーさんが、現れたせいで、本来の目的を忘れてました。
そうだ、いくらアーチャーさんと戦つても、ジュエルシードを封印

しなきゃ意味が無いんだ！

「ごめん、アーチャー。少し、遅くなつた。」

「いや、構わんよフロイト。じつらも、どうやら回りつが魔力切れ
のようだ。

では、ここに居る意味はもう無いな。

行くか、フロイト？」

「うん。」

私は、魔力切れのせいで、喋る事もできず、ただアーチャーさんと
そのマスターのフロイトちゃんを見ている事しかできませんでした
……

第五話「正義の味方（見習い）VS 錬鉄の騎士」（後書き）

今回は、なのはの惨敗でおわりました。

なのはが使った、オリジナルの技鶴翼四連の説明をします。

鶴翼四連

なのはが、鶴翼三連を応用して作り上げた技。

あらかじめ、一対の干将莫耶を投げてから、攻撃に転じるところまでは、鶴翼三連と同じである。だが、鶴翼三連と違い、三対の同時攻撃ではなく、時間差の攻撃である。また、三対目の干将莫耶を、わざと消すのは、相手に隙を作らせる為であり、所見で見切る事は難しい。また、高速の移動が出来無ければ、相手の反撃を受けてしまつ為、危険な技もある。最後の四対目の攻撃では、なのは自身を相手にすれば、一対の干将莫耶が、二対の干将莫耶を相手にすれば、なのはがと防ぐ事も難しい。弱点とすれば、フロイトのようなスピード型に、回避される事である。

では、最後に感想をくれた

雨季様、池上竜馬様、碧河悟空様

ありがとうございます！

裏第四話「アーチャー召喚」（前書き）

今回は、第四話「遭遇」の裏話
アーチャーが召喚された、後の話です。

裏第四話「アーチャー召喚」

裏第四話「アーチャー召喚」

「答へは得た、大丈夫だよ遠坂」

俺は、精一杯の笑顔を、目の前に居る少女に向ける。

今回の聖杯戦争で、俺のマスターであり、裏切り者の俺に、再契約を望んだ優しい少女に……

「決して間違ひなんかじやない……」

俺は、この聖杯戦争で……まさか、殺そうとしていた、自分から答えを得られるなんて、思いもしなかつた。

でも、俺は答えを得たんだ。なら、もう一度、理想に燃えるのもいいかも知れない。

この身は、折れた剣……折れていいるのなら、また使えるように、作り直せばいい！

作り直せなくとも、残つてゐる刃を使えばいい！
だから、もう一度頑張つていける。

「俺もこれから、頑張つていくから」

そういう、俺の体は足から消えていった。

少しづつ消えていき、もう下半身がなくなつた状態になると、遠坂が俺に何かを投げてくる。

俺は、反射的にその何かを取つた。

それは、依然遠坂に返したはずの遠坂の父、時臣の形見の宝石だつた。

「お、おい遠坂！？」

「餞別よーちゃんと持つて行きなさいーー！」

その言葉に、自然と笑みが浮かぶ。

ああ、ならありがたく頂いていくよ - - -

既に、声が出ない状態だったが、それでもそう言つた。

そして、俺は座に戻つていった。

* * * * * * * * * * * * * * * * *

座に戻ると、外で感じた事・考えた事が、記憶になつてしまつ。俺も、今感じてゐるこの気持ちも、記憶になつてしまつんだろうか？

俺は、右手に握つてゐる、宝石を見る

例え記憶になつても、何度も考えて抗つてやる。

そう決意しながら、俺は座に着くのを待つていたが、別の方に向に引

つ張られる感じがする。

(まさか、座に着く前に、召喚されるとはな……)

座に着かなくても、召喚される事はある。

だが、それも今まで召喚された中で、そつ多くは無い。

けれど、このまま召喚されたら、今の気持ちを残していられる。

(例え、”守護者”として、召喚されようが、全てを救つてみせる

!)

俺は、決意を新たに召喚された。

そして、出た場所は、森の上だつた……

(俺は、世界にでも嫌われているのか？

まさか、連続で上空に召喚されるとは……)

そう考えていると、頭の中に情報が流れれる。

(――魔術師がいなく、聖杯が無いだと、という事は、平行世界
なのか!!!!?)

だが、クラスとクラススキルがあるとは、どんな召喚だ！？？

そう考へてゐる内に、俺は、森へと落ちていった。

幸いにも、茂みに落ちる事ができ、地面に落ちるほどどの、痛みは無
かつた。

そのままの体勢で、前を向くと、一人の少女が、右手を押さえながら立っていた。

「やれやれ、まさか一度もこのような召喚をされるとはな。」

まずは、このマスターについて知らなければな。

この子が、言峰のような考えの持ち主なら、協力したくは無いしな

…

少女は、黒い杖?をこちらに向けて来た。

「あ、あなたは、何者ですか？」

さすがに、いきなりこのような男が現れたら警戒するだろうな。

私は、さつきのように”アーチャー”としての話し方を続ける。

「ふむ、何者とは、私を召喚しておいて随分な言いようだな、マスター？」

「私が、召喚?」

「そうだ、私は君に召喚されてこの場に居る。」

少女は、私が敵が目の前に居るかもしれないにも関わらず、何か考え方をしてるよう見える。

「わ、私は召喚魔法とかは、使えません。

出鱈目を言わないでください!!」

「別に、嘘ではない。

私が、現れる前に何処か痛みは無かつたかね?」

少女は、「あ!!!」と言い、自分の右手を見た。そこには、赤い三つの模様があつた。

「それは、令呪といって、私のような、マスターのサーヴァントを持つてる証であり、

絶対命令権もある。」

「令呪?サーヴァント?」

「質問は後にしたまえ、いまは休む方が先だ。」

マスターも私を召喚して、大分魔力を消費してるだろ?」

そう言い、私はマスターを抱え、太い木の枝を足場に跳ぶ。

「あ、あの!お、降ろしてください!!?」

「私が走った方が、早い。それと、出来るだけ、口を開くのは止めた方がいいぞ、マスター？」

舌を噛むことになる。後、自分の家の方を指差したまえ。」

私が、マスターの意見を封殺し、そのまま走る。

マスターも観念したみたいで、素直に従つてくれている。

さて、ここからどうなる事やら？

* * * * * * * * * * * * * * * * *

さて、なんだろかこの状況？

マスターは、おろおろとしており、マスターの姉？らしき人物には、謎の魔術で、拘束されてしまい、

私は、その謎の魔術に拘束され床に倒されている。

(……なんですか)

ついつい昔の口癖を言つてしまつ。

「アンタは、一体フェイトの何なさ……！」

「あ、アルフ？一応、話位は聞いてあげよ？」

「フェイト、一体こいつは何なさ！？」

「……なあ、話を聞いてくれないかね？」

と、言うわけで、フェイト？と呼ばれたマスターと、アルフ？と呼ばれたマスターの姉？の向かい側に、私は拘束されたまま座る。

「で、結局アンタは、フェイトのなんなさ……！」

「私は、フェイト？のサーヴァントだが……」

「あ、あのサーヴァントってなに？」

「簡単に言えば、使い魔の様なものだよ」「フェイトには、あたしつて言う使い魔が居る！！あんたなんか、要らないよ……！」……サ

ーヴァントは、君のような存在とは違う。サーヴァントは、過去・未来に偉業をこなしたりした、英雄のような存在だ。」「

「英雄……？」

やはり、このような話はあまり信じられないよつだ。だが、一応本当の事だがな。

「じゃあ、なんでアンタが居るのを……過去や未来に居る奴が、今いるわけないだろ！……」

「……だから、さつき召喚つて、言つたんですか！？」

「ああ、私たち、サーヴァントは”座”と呼ばれる時間軸から、外れた場所に居る。

だから、召喚する際に、過去や未来に召喚されることができる。

「だ～か～ら～！私、居るから、アンタなんか必要ないんだよ！」

「わ～わ～と、座とか言つといひて寝りな！……！」

＜以下、ずつとアルフが否定し、フェイトがアーチャーに興味を持ち、アーチャーはずつと頭をかかえながら、アルフの説得をしていった。＞

「あ、アルフ一応この人は、私の使い魔だから、一緒に行動するってことでいいよね？」

「うううう、フェイトが言うなら仕方ない……でも……あたしは、認めてないからね！……」

まったく、いつまでもイタチゴツコだな……

「さて、私はまだ、君達の名前を聞いてないんだが……」

一応、名前の交換も契約に必要だからな。

「あ、そういうば、そうでしたね。」

私は、フェイト・テスタークロッサです。」

「……アルフだよ」

「私は、アーチャーと呼びたまえ。」

そして、フェイト

「は、はい！」

まだ、硬いな……まだ、仕方が無いか。

だが、今はそれよりも言わなければならぬことがある。

「合格だ！！」

「えっ？」「はあー？」

「フェイトは、俺のマスターとしてふさわしい者だと、判断したよ。さつきまでの、口調に関してはすまなかつたな。」「これが、俺のだした結論だ。

フェイトは、俺のマスターとしてふさわしい。
だからこそ、彼女達を絶対に守る！！

それが、俺のだした答えである。

「さ、子供は、もう寝る時間だ。

俺の召喚で、魔力をかなり消費してるだろ？」「う、うん。

「あんたに、言われなくともそのつもりだよーーー！」

俺は、フェイトとアルフを寝室へと、送つて行つた。

だが、まだアルフには嫌われてるようだな……

俺は、苦笑しながらそれを見送つた。

そして、一人になった俺は、誰も居ないはずのリビングを目に向ける。

「そこに居る者、出てきたまえ。」「

俺しか居ないはずのリビングに声が響く。

それと同時に、田の前が、歪んでいき一人の少女（幼女？）が半透明で、出てくる。

『まさか、見つかるとは思わなかつたよーーー』

そこに出てきたのは、まるでフェイトがそのまま小さくなつて、5・

6歳くらいまで小さくなつた感じだ。

だが、見たところ、害意はありそつも無むそつだ。

「君は？」

『私は、アリシア・テスター！フェイトのお姉ちゃんです。えつへん！』

そう言って、胸を張るアリシアは、見た感じ通り子供のように見え

る。

『アーチャー、だつたよね？私のお願ひを聞いてもらえるかな？』
「内容によるな。」

そして、私はアリシアと色々と話し合つた。

裏第四話「アーチャー召喚」（後書き）

今回は、第四話の裏話でいした！

そして、幽霊アリシア登場！！

できたら、アリシアの蘇生を試みたいです！！

最後に感想をくださった

雨季様、

ありがとうございます！！

第六話「召喚」（前書き）

ついで、なのはがサーヴァントを召喚ーー！

第六話「召喚」

第六話「召喚」

アーチャーさんと、フェイトちゃんが、この場所から帰つてからすぐには、私は足に力を入れ立ち上がりました。

私は、一つの決意と共にアリサちゃんとすずかちゃんのところに向かい歩き出します。

「なのは、大丈夫？」

「大丈夫だよ、ユーノ君……ちょっと、魔術用の魔力が切れただけ『すみません、マスター……私が、もつとマスター向きの杖でしたら……』

「いいよ、レイジングハート。今回は、私も冷静にいられなかつたし……

それに、私は魔術の修行が主だったから、魔導師としては弱いから

だから、帰つたら修行しよ……」

『はい、マスター！』

私たちは、お互ひを励ましながら、皆のところに帰つていきました。

「ちょ、ちょっとなのは、びづいたのよ！？」

「そんなにふらふらで……」

「なのはちゃん、大丈夫？？」

戻ると、案の定二人に心配されたいました……

「えっと、すずかさん、アリサさん。なのはは、大丈夫です。

ただ、魔力切れなだけです。」

私の変わりに、ユーノ君が代弁してくれました。

「え！？？なんで、二人とも固まってるの！？」

「ユーノ、あんた喋れたの！！」

「な、なのはちゃんの使い魔のユーノ君って、喋れたんだ……」
「あ……そう言えば、一人にはユーノ君が喋れる事言つてなかつたん
だっけ……」

「あ、あの僕は使い魔じゃなくて人間です！」

今は、魔力が少なくなつてゐるから、燃費がいい動物の姿になつてゐ
だけです！！」

「あ、なんとなぐだつたけど、やつぱり人だつたんだ……」

「あ、すずかちゃん、恭也お兄ちゃん呼んできてくれないかな？」

「……あ、う、うん。いいよ。」

そういうつて、すずかちゃんは走つてドアへと向かいましたけど、
ドアが開きました。

「その必要は無いぞ。」

「なのはちゃん、大丈夫だつた？」

入つてきたのは、恭也お兄ちゃんと、すずかちゃんのお姉さんで、
恭也お兄ちゃんの恋人の忍さんでした。

「それで！なのは、一体何があつたのよ？」

「うん、今から話すね。」

私は、皆にさつき合つた事を話しました。

もう一人の魔法少女・フロイドちゃんと会つたこと、そしてアーチ
ャーちゃんが現れた事……

「まさか、サーヴァントが、この世界に来るとは……」

話し終えると、皆暗い顔をしています。

だって、サーヴァントがいるつて事は、聖杯戦争が起つて可能性が
あるからです。

「ねえ、恭也お兄ちゃん。」

「…どうした、なのは？」

「今日は、土蔵に近づかないで貰えないかな？」

「どうしてだ？」

私は、さつき決意した事をいいます。

「や」で、サーヴァントを召喚するの」

* * * * * * * * * * * * * * * *

夜の十時ごろ、私は土蔵で、一つの魔方陣を描きます。

サーヴァントの召喚については、恭也お兄ちゃんとお父さんに反対されました。お母さんの”お話”で納得してくれました。……そういえば、よく士郎お兄ちゃんも、よく人助けをしてて危ない事に巻き込まれそうになつてたから、お母さんに”お話”されてたなーそんな訳で、今土蔵の中には、私だけです。

皆は、土蔵の外で待つてくれています。

魔方陣も描き終わり、後は呼び出すだけです。

私は、目を瞑り詠唱を始めます。

「素に銀と鉄

礎に石と 契約の大公

祖には我か師 衛宮士郎

振り立つ風には壁を

四方の門は閉じ 王冠より出で

王国に至る三叉路は 循環せよ

閉じよ 閉じよ 閉じよ 閉じよ 閉じよ

繰り返すつど五度 ただ満たされる時は破却する

- - - - A n f a n g

詠唱をする”とこ、描いた魔法陣が光浮かび上がっていく。

私は、それを気にせず詠唱を続ける。

「告げる

汝の身は我が下に 我が運命は汝の剣に

聖杯の寄るべに従い この意この理に従うなら應えよ
誓いを此処に 我は常世総ての善となる者

我は常世総ての惡を敷く者

汝三大主 言靈を纏う者

召喚の為に大量の魔力と、集中力を使い既に立つてゐるだけがやつとです。

それでも、最後の言葉を紡ぎます。

「抑止の輪より来たれ 天秤の守り手よ！！」

私が、最後の言葉を紡ぐと、大きな風が吹きました。

その風を受けながら、私はただ目の前に居る人物しか見れませんでした。

金色の髪をなびかせ、青い服には、銀色の鎧を着けている。

「問おう……貴方が、私のマスターか？」

この光景を、私は忘れないだろう。

「サーヴァント、セイバー」とアルトリア・ペンドラゴン、召喚に応じ参上した。

「とても、凛としていて……」

「例え、この世界に聖杯と言つ壊れた願望機が無くとも、」「とても、綺麗で……」

「我が剣が、汝の道を切り開こう。ここに、契約は完了した」
そんなサーヴァントのセイバーさんを私は、召喚していた。

第六話「召喚」（後書き）

今回は、なのはのサーヴァント召喚です。

たぶん、皆さんの予想通りのサーヴァントを召喚したと思います。
このセイバーは、アーチャーと同じく、凛ルートからきています。

そのため、既に聖杯になど興味は無く、今まで騎士として過ごしてきた分、女の子としての平穏を求めて召喚に応じています。
最後に、感想を下さった

プラスト様、雨季様、池上竜馬様

ありがとうございます！

第七話「温泉街での決闘！前編」

第七話「温泉街での決闘！前編」

セイバーさんを召喚して数日、世間では「ゴーラデンウイーク」となっています。

「ゴーラデンウイークでは、iji、高町家もお店はバイトの人任せで旅行に行くことになります。

今回のメンバーは、高町家 + アリサちゃん + すずかちゃん + 忍さん + ノエルさん + フアリンさん + ゴーノ君 + セイバーさんの総勢12名の大所帯になります。

セイバーさんは、家族の顔と色々と話して、もう家族の一員です。

セイバーさんは、じつやうじ十郎お兄ちやんとは違う平行世界から來たそうです。

それでも、十郎お兄ちやんは、十郎お兄ちやんみたいで、やつぱり無茶をしてたそうです。

アーチャーさんの話題になりましたけど、セイバーさんは知らないみたいです。

それでも、魔法の特訓もしてゐし、今度は負けないよつて頑張りました！

* * * * *

温泉からでて、私はアリサちゃん、すずかちゃん、セイバーさんと

の4人で、温泉街に出てます。

ユーノ君は、本当は男の子だからと、お父さんと恭也お兄ちゃん、ユーノ君が大きく主張してきて、私たちとは別に、男湯の方に行つてしましました。

「ねえ。この温泉街の散歩が終わつたら、卓球しない？」

「たつきゅう、ですか？」

あ、やっぱセイバーさんは、卓球やつた事無いんだ。

「はい、簡単に言つと、ラケットでボールを打つ、スポーツなんですよ、セイバーさん。」

「なるほど、らけつと、と言つ物は何か解りませんが、スポーツなのですね。

解説をありがとうござります。スズカ。」

この後、卓球をやる事も決まり。

ただ、散歩してるだけなので、宿に戻つて、卓球をやる事になりました。

私たちが、引き返そうとした時、「はあーーい、おちびちゃん達」

オレンジ色の紙をした女の人に声をかけられました。

「ふむふむ……

あんまし賢そうには見えないねえ……

ただの、ガキンチョに見えるけど……」

「なのは、知り合い？」「ナノハ、知り合いでですか？」

私は、この人にあつたか思い出してるけど、思い出せず、顔を横に振ります。

「この子は、あなたの事を知らないようですが、どちら様ですか？」

アリサちゃんが、あの人を睨みつけながら言います。
いざとなつたら、私やセイバーさんが守らないと！――

「アハツハツハツ――！」

ごめんね、人違ひだつたや、知つてる子に似てたからや。」

「あ、なんだ。そつだつたんですか……」

女人人は、そう言つて私たちの横を歩いていきました。

『今の所は、挨拶だけだよ。』

いきなり届いた念話に、いつでも投影できる準備をします。

(レイジングハートは、ここだと目立ちすぎる！！)

『忠告しとくよ。

子供は、大人しくしどきな、おいたが過ぎると、ガブツッと行くよ

！』

そう言つて、あの人は去つていきました。

たぶん、あの人は、フェイトちゃんの仲間だ！

「アリサ、このまま戻れば、さつきの輩と、また遭遇します。
もう少し、この辺りを、散歩しませんか？」

「そう、ですね。

なのは、すずか、もう少し散歩しよー。」

私たちは、そのまま散歩しました。

* * * * * * * * * * * * * * * *

あれから、ユーノ君と合流して、さつきあつた女人について話し
合いつたところ、フェイトちゃんの仲間だろう、と完結しました。
それで、戦う時は、私がフェイトちゃん、セイバーさんがアーチャーさん、ユーノ君があの女人の人と決定しました。

「ユーノ君、戦闘になるけど大丈夫。」

「うん、僕は大丈夫だよなのは。

ずっと、フェレットだつたから魔力も大分回復できたり、
セイバーさんは、大丈夫ですか？」

「私は、問題ありません。

アーチャーの足止めはしつかりします。』

そう話し合つてると、ジュエルシードが、発動したみたいです。

「それじゃ、頑張ろうー！」

「うん…」「はい…」

* * * * * * * * * * * * * * *

私たちが、大急ぎで来ると、フロイドちゃんと、アーチャーさんと
さつきの女の人がいます。

ジュエルシーードの反応が無いから、たぶん先を越されちゃったんだ
……
「あーらあらあら、大人しくしてるって折角忠告したのに来ちまつ
たのかい？」

「そのジュエルシーードをどうする気だ！それは危険なものなんだぞ
！？」

「アルフ、君はそんなの事をしてたのか……明日の朝食のおかずを
一品減らせれたいか？」

「ちょ、ま、まってくれよ、アーチャー。ただ、忠告しに行つただ
けだから、そんな事しないでおくれよ……」

ユーノ君が、叫ぶけど、アーチャーさんはぐらかされます。

「そ、それより、あたしは、親切で言つたんだよ。
おいたが過ぎると、ガブツと行くよつて……」

そういうて、アルフ？さんは、狼になりました。

「なのは、セイバーさん！あいつ、使い魔だ！」

「そうや。あたしはこの子に創つて貰つた魔法生命体。

この子の魔力で生きる代わり、命と全の力で主を守るんだよ……！」

そう言って、アルフさんが襲い掛かってきました。

ユーノ君が、私の肩から飛び、障壁を張つてアルフさんの攻撃を防
ぎました。

「なのは、作戦通りに行つて！」

「うん！」

「ま、転移の魔方陣……しませ」

ユーノ君は、アルフさんと一緒にどこかへ転移して行きました。

「……良い使い魔を持つてるね。」

「ユーノ君は、使い魔じゃなくて、友達だよー。」

「今度は、油断しない！！！」

そう言つて、フェイトちゃんが私に近づいてきました。

私は、レイジングハートで弾きながら、この場を離れます。

side out

side セイバー

ナノハがフェイトを、ユーノがアルフを、相手にこの場を離れて、
私とアーチャーの二人だけになります。

「久しぶり、いや、始めてましてといつた方がいいですか、アーチャー？」

「その口ぶりだと、どうやら俺の事を知ってるみたいだな……
久しぶりだな、セイバー。」

”私”、では無く”俺”ですか……どうやら、彼は私が知ってるアーチャーとは少し違うそうだ。

「セイバー、君は、どの平行世界から、来たんだ？」

「あなたと、士郎が戦い、士郎がかつた世界からです。」

「なるほど、どうやら俺と似た……または、同じ世界から来たみたいだな。」

なるほど、つまり彼はあのアーチャーのようですね。

「あなたは、まだ士郎を殺したいと思いますか？」

「いや、もう思つてないよセイバー」

えつー？もう士郎を殺そうと思つてない、彼は、答えを得られたのでしょうか？

「まったく、皮肉だよな。殺そつとした相手と、裏切つた相手から
答えを得れるなんて……」

これで、これでアーチャー……いや、士郎も救われたのでしょうか？

それなら、とても嬉しいですね。

「それでは、私たちも戦いますか、”シロウ”」

「ああ、マスターが戦つてゐるのに俺達だけが話すのも変だしな。この事件が終わったら、ゆっくり話したいものだな。」

「それはいいですね、シロウ。」

私たちは、互いに笑いあつた。

エミヤの笑顔は、あの士郎の笑顔そっくりです。二人が同じ人だと、よくわかりますね。

「そうそう、私のマスターのナノハの魔術の師匠が、士郎でしたので、ナノハのまえでは、アーチャーと呼びますね。」

「まったく……平行世界の俺はなにやってるんだか……」

ふふ、まったくですねシロウ。

「では、いきますよ！」

「ああ、セイバー！」

この事件が終わって、早くシロウの御飯も食べたいですね。

第七話「温泉街での決闘！前編」（後書き）

ユーノの淫獣フラグ回避！！

個人的には、ユーノはあまり好きじゃないんです！！

そして、ついに邂逅したアーチャーとセイバー！二人の約束を早く叶えさせてあげたいです！！

最後に感想をくれた

プラス・ト様、雨季様、シャオレイ様

ありがとうございました

第八話「温泉街での決闘！後編」（前書き）

一週間ぶりの投稿です。

今回は、後編ですので、前編を見てない方は（たぶんいないと思うけど）

前編を見てください！

第八話「温泉街での決闘！後編」

第八話「温泉街での決闘！後編」

海鳴市から、外れの辺りにある海鳴温泉。

今、ここでは、二人の少女達が戦っていた。

金色の槍のような魔法弾と桜色の球体のような魔法弾が、お互いをぶつけ合い相殺していく。

なのはは、まだ慣れず術式が甘く脆い誘導弾で牽制していき、接近するチャンスを狙っている。それに対し、フェイトは、

なのはが魔法に慣れていないことを知り、遠くから最低限の魔法弾で接近させまいと、距離をとっている。

簡単に言えば、なのはの10の魔力で作った誘導弾に対し、フェイトの1の魔力で作った誘導弾で相殺していることになる。

これを繰り返しており、戦況は均衡しておる。

(このままだと、魔法に慣れてるフェイトちゃんに負けちゃう……)

(この子、魔法に関しては初心者なのに接近戦では強い……)

お互いが、相手の事を賞賛し、勝つ為に戦略を考えている。

フェイトは、自慢のスピードにより高速に接近し、一撃で倒せるタイミングを探っている。

それに対し、なのはは、消費の多い投影魔術を使わずに、強化の魔術で身体強化しつつ、最低限の魔力で接近するタイミングを探っている。

だが、使用できる魔法が多いフェイトに対し、使用できる魔力が、少ないなのはは、長期戦では、手札が少なく、応用性にも掛けて不利である。

(（こ）は……勝負に出るしかない……)

お互に、一つの賭けにすることにした！

なのはは、己が使える切り札の一つ、”ディバインバスター”を、フェイトは、あまり得意ではない砲撃系の魔法”サンダースマッシュヤー”の術式を発動した。

「ディバイン……」

「サンダー……」

『「バスター！…』『「スマッシュヤー！…』

桜色の砲撃と、金色の砲撃がお互いの杖から放たれ、ぶつかり合う。お互いの魔法が、ぶつかり合い均衡している。

だが、均衡はしているお互いの砲撃魔法は、徐々に消滅していく、ついにはお互いの砲撃魔法は、消滅してしまった。

砲撃を打ち終わったなのは、砲撃の先に本来居るはずのフェイトを見ようと目の前を向きが、そこには、フェイトは居なかつた。

「はあ――――！」

だが、下からフェイトの叫び声が聞こえた。

なのはは、大急ぎで声のほうを向くと、そこには高速魔法で接近していくフェイトが見えた。

フェイトの手には、ハーケンフォームにしたバルティッシュを持つていた。

フェイト自身、なのはを切りつけようとは思つておらず、寸止めにして負けを認めさせる気だ。

だが - - - - -

- - - - - - - - - - - フェイトの振るバルティッシュを、なのはは紙一重でかわし距離をとつた。

そして、さつきフェイトを確認した際に、術式を一つ起動させていた。

その術式は……

『「 ”ディバインセイバー” ! ! ! 』

「つーーー！」

二つの桜色の短剣型魔力弾が、ブーメランの様に飛び、フェイトへ向かつていった。

フェイトは、”ソニックムーブ”を連続で行い、ブーメランの様に、何度も向かつてくる”ディバインセイバー”をかわし、バルディッシュで切り裂いた。

なのはは、その隙に……

「 ”^{トレス・オン}投影開始” 」

莫耶を投影し、フェイトへと接近していった。

「 ! しまつ …… 」

だが、接近するなのはの目の前を一本の矢が、進行を妨害した。その矢により、なのはは、立ち止まってしまう。

フェイトは、その矢により出来た隙を、利用し、”ソニックムーブ”で、なのはに接近し、

なのはの首筋にバルディッシュを添える。

『 プット・アウト 』

「 レイジングハート！ ? 」

なのはは、いきなり、自分の相棒が勝手に、ジュエルシードを出したのに驚いてしまった。

「 …… 主思いの良い子だ 」

そう言い、フェイトは、近くの木まで跳ぶ、そうしてみると、二人の相棒達が戻ってきた。

「 はあはあ、さ、さすがフェイト！ 」

「 もう少し、予想外に対する対処方を学んだ方がいいぞ、フェイト。 」

「 そん、な…… 」

「 すみません、ナノハ。油断しました。 」

ユーノとアルフは、息を切らせている。

セイバーは、何やらやり切れない顔をし、アーチャーは、黒塗りされた弓を持ち不敵に笑っていた。

「それじゃ行こう、アルフ、アーチャー」

「待つて！」

このまま去ろうとする、フェイト達をなのまは呼び止める。

「私は、高町なのは……あなたは……？」

「フェイト。フェイト・テスタークサ

そう言い、フェイト達は、飛び去ってしまった。

第八話「温泉街での決闘！後編」（後書き）

今回は、なのは対フェイトです。
意外と、なのはが強くしすぎたかも……
そして、作中で使われた新魔法”ディバインセイバー”の説明をします。

ディバインセイバー

なのはの誘導弾”ディバインショーター”を改良し作った魔法。短剣型の魔力弾（魔力刀？）。

イメージとしては、干渉莫耶が桜色になり、小型化した感じです。ブーメランの様な軌道をし、相手に襲い掛かります。

この魔法は、なのは自身気にいつており、ディバインショーターより手を掛けており、術式にはむらが無く出来ている。

将来的には、”ディバインセイバー・ブラスト”と言つ魔法も加わるディバインセイバー・ブラストは、ディバインセイバーを引き寄せる性質を持つ。

最後に感想をくれた、

煌焰様、ノース様、雨季様
ありがとうございます

第九話「戦いを終えて—フェイト組side」

第九話「戦いを終えて—フェイト

組み side」

side アーチャー

「なに？ 戦い方を教えて欲しい？」

「う、うん……」

俺と、フェイト達はやつきのジュエルシード争奪戦を終えて、占拠であるマンションに戻ってきた。

が、戻るなり、フェイトが戦いを教えて欲しいと頼まれてしまった。「フェイトは、今でも十分に強いと思ってるが……」

「そうだよ、フェイト。アーチャーの言つ通り、フェイトは強いよ。

」

これは、俺の本心だ。

フェイトなら、聖杯戦争時の俺に楽勝で勝てるだろう。

むしろ、もう少し戦闘経験をつめば、たいていの魔術師にも勝てるはずだ。

「ううん、私は弱いよ……」

この前の戦いや、今日の戦いで、アーチャーが援護してくれなかつたら……

たぶん、私はあの白い子に負けてよ……」

確かに、あまま行けば、フェイトは負けていたかもしれない。

あの白い魔導師（確か、なのはだつたか）の戦い方は、昔の俺に似

ている。

戦いの中で、わざと隙を作り、そこをついてきた相手へのカウンターを主としている……

だが、それはあくまで衛宮士郎の戦い方。あの子の戦い方じゃない。おそらく、その為に自分のスタイルを、少し変えたのだろう。技術が荒削り過ぎたからな。

「ふむ……フェイトが、弱いと言つより、あの子の戦い方がそう思はせているのだろう。」

「? どういうことだい、アーチャー？」

「あの子の使える手札の中に、フェイト達が使う魔法とは、違うものがあつただろう?」

「うん、あの子が”トレース・オン”って言つと、アーチャーが使う双剣が出てきてた。」

始めは、転移系の魔法かなつて思つたんだけど、魔方陣が出てなかつたから、私たちとは、別の力だつて分かつた。たぶん、あれはアーチャーと同じ力だと思つ。」

さすがフェイトだな。

あの少ない情報から、そこまで分析出来るとは……

これは、魔術について、少し教えておくか。

「ああ、その通りだ。

あの子の使う力は、俺と同じ魔術だ。」

「魔術?」

「ああ、魔術は、この世界に限りなく似ていて、限りなく違う世界。平行世界という、所にある、地球の魔術体系だ。」

「平行世界?」

「なあ、アーチャー?」

その話で、アンタについても分かるのかい?」

フェイトは、平行世界について考えているようだが、アルフは俺と言つ存在について分かるかも知れないと言つ期待の籠つた目をしている。

(まつたく……初めて会った時より、かなり懐かれているな)
「ああ、俺はとある平行世界で生まれ育ち、英雄となつた存在なんだ。」

その世界には、フェイト達が言つ魔法も次元世界もない。
魔術師と呼ばれる者たちが、己の魔術の研究を隠れてと行つてゐる。

「? なんで、隠れてるの?」

「魔術はな、フェイト。秘匿しなきゃいけないんだ。
魔術師の中の法律と言えば、魔術を秘匿することだけなんだ。」

「そりなんだ。」

「それで、アーチャー?」

アーチャーと、あの白い子が使つてゐる魔術つてなんだい?
まったく、アルフはせつかちだな…………まあ、いいか。

「俺もあの子も、使つてゐる魔術は投影と言つ魔術なんだ。」

「投影?」

「やう、簡単に言つと、魔力で物の偽物を作る魔術だ。…………ほ
ら」

そう言い、俺は口の中で、投影開始と咳き、フェイトの杖であるバルディッシュュを投影する。

(うん、なかなかの出来だな。ただ、やっぱり中の精密機械の方は、
投影できなかつたか。)

フェイト達は、俺が投影したバルディッシュュ(偽)と、今フェイト
がセットアップしたバルディッシュュ(真)を交互に眺めている。

「す、すご…………」

「ほ、ホント……バルディッシュュそつくり…………」

「これは、ただ似てゐるだけだよ。」

中身が無いから、これを使って魔法は使えないわ…………

まあ、剣だったら、本物に限りなく近い偽者を作れるぞ。」

「…………ねえ、アーチャー?」

「どうした、フェイト?」

「私にも魔術、使えるかな？」

ま、待て、今フェイトはなんて言った。

魔術が使えるかだと……俺としては、お勧めは、出来ない。

魔術は、まず自分を殺す事から始めなくちゃいけないし、この世界にはフェイトが言つとおりなら、時空管理局と言う組織がある。なら、フェイトに魔術を教えれば、管理局とやらが黙つていらないだろう。

つて、アルフ！お前は、今何をフェイトに教えている！！？

「だめ……かな？」

ふえ、フェイト、そんな涙田+上田遣いをするな。俺の良心を削るな！！

それより、どこでそんなのを覚えた！！あれか…さつきの、アルフの耳打ちで教えられたのか！！？

しかも、”諸悪の根源（アルフ）”は、腹を抱えて大笑いか！！！つて、アリシア（フェイトとアルフには見えていない）！！お前もか！！！

くそつ……

「……明日、適正があるか、調べよつ……

適正があつたら、教えるよ・・・

だから、今はもう寝てくれ

「うん！アーチャー、お休み！！！」

フェイトは、意気揚々と寝室に向かう。ちなみに、アルフは、まだ笑っている。
なんでも……

第九話「戦いを終えて—フェイト組side（後書き）

今回は、温泉街でも戦いのあのフェイト達でした！

つというか、アーチャーが大分壊れた気がするけど、気にしない方面でお願いします！！

このまま行くと、フェイトも魔術師フラグが立つかも……

最後に、感想をくれた

雨季様、Rowain様

ありがとうございます！！

第十話「戦いを終えてーなのは組 s-i-d-e『前書き』

前回は、フュイトグループの反省会でしたが
今回はなのはグループです。

第十話「戦いを終えてーなのは組side『reals』

第十話「戦いを終えてーなのは組 side『reals』

「reals」

side なのは

「すみません……ナノハ……」

今回の戦いが終わってから、一回立ちました。
けど、セイバーはずつとこんな調子です。

アーチャーさんと戦つての途中、弓の迎撃に専念しきりで、フェイ
トちゃんへのサポートを許してしまったことを、ずっと悔やんでる
そうです。

しかも、それで私が、負けてしまったことが、追い討ちになつたそ
うです。

「大丈夫、セイバーさん。次は、負けないようになんばる!」

「そうですよ、セイバーさん。あの、アーチャーって人が強かつた
んですよ。」

「いえ、ユーノ。彼は、弓以外の才能はありません。

ですが、弓の腕なら誰にも負けないほどの実力があります……」

アーチャーのサーヴァントだから、弓とか銃を得意としてるのはわ
かっていますが、アーチャーさんは、士郎お兄ちゃんからのお話だと、
よく双剣（干将莫耶）使つてゐるつて聞いてましたけど、弓の腕前
は聖杯戦争中に見た事が無かつたらしいので、知りませんでした。
「……アーチャーって言つ名前は、伊達じやないつてことなんです

ね…

そつか、そう言えばユーノ君には、サーヴァント（魔術も）について教えてなかつただつけ…

士郎お兄ちゃんには、魔術は秘匿するよつに言われてたから……
サーヴァントくらゐなら教えていいよね。

「ユーノ君、サーヴァントについて教えてあげるね。」

「え、いいの！？」

魔術に関しては、秘密にしなきやいけないんでしょ？」

「うん。だから、サーヴァントについてだけね。

サーヴァントつていうのはね。簡単にいうと過去や未来で偉業を行つた人たちが、死んじやうと英靈つていうのになる。英靈になつた人は、座つて呼ばれる時間が無い世界に行くの。」

「過去や未来での偉業つて、それじやあセイバーさんは、前は英雄だつたんですか！」

「はい。私は、生前では一国の王を務めてました。

今の時代では、アーサー王伝説と言う本などで、語られています。セイバーさんがそう言つと、ユーノ君が固まっちゃいました。

にやはは、やつぱり今まで一緒にいた人が、王様だつた人だなんて驚いちゃうよね。

「えつと、続きを話すね。

それでね、英靈になつて座に行つた人たちはね。

聖杯戦争つていう儀式にサーヴァントとして召喚されるの。

サーヴァントは、”セイバー”・”アーチャー”・”ランサー”・”ライダー”・”バーサーカー”・”アサシン””キャスター”の七つに分けられる。

分けられ方は、その人にどのクラスが適しているかで、分けられるの。

それなら、本当の名前もばれないから、弱点とか分かりずらいの。

「私は、王であり、騎士でもあつたのでセイバーのクラスに当てはまりました。」

「それが、サーヴァントなんだね、なのは。」

「うん、そうなの。」

簡単にだけど、これで解ってくれたならいいよね。

「つてことは、あのアーチャーって奴も英雄だつたのかな?」

「うーん、どうなのかな?」

私は、アーチャーさんについては知らないから分からぬや……

セイバーさんは、どう?」

「私は、彼の正体は分かりません。

ですが、彼は反英雄つてことは知っています。」

「「反英雄?」」

反英雄つて、士郎お兄ちゃんは、教えてくれなかつたな……
どういう人、なんだろ?」

「反英雄つていうのは、過去や未来に偉業をこなしたのではなく、
何らかの悪事などにより、語り継がれた者です。例えば、アサシン
のクラスの英靈なら、暴君である王を暗殺することで、一般的に悪
ではあります。民衆からは英雄と言われたりします。

アーチャーの場合は、”多くの人を助ける為”に人を殺してしまつ
ていた為、一般的に悪とされたからです。」

セイバーさんの言葉に、私は反応してしまいます。

”多くの人を助ける為”
まるで、士郎お兄ちゃんのような生き方です。

「で、でもセイバーさん、アーチャーについてそんなに知ってるな
ら、本当の名前が分かるんじゃないですか、セイバーさん?」

「いえ、彼の場合は、それほど有名じゃないらしく、分かりません
でした。」

「そう……なんですか

つて、なのは、どうしたの?」

あ!いけないいけない。

つい、考え込んじゃつた。

「大丈夫だよ、ユーノ君。

ちゅうと、考え事してただけ……」

やつぱり気になるな……

わたくしの話聞いてからずっと、アーチャーさんのこと覚えると、なぜか士郎お兄ちゃんのことを思い出しちゃいます。

「ナノハ、あまり深く考えすぎない方がいいですよ。考えすぎれば、回りが見えなくなってしまします。」

「うん、セイバーさん……」

……そうだ！セイバーさん、恭也お兄ちゃんと模擬戦してみない？」「恭也ですか？

確かに、以前模擬戦を挑まれましたが……」

「お兄ちゃんたちは、御神流っていう剣術を使つてゐるのもしかしたら、いい経験になると感づの。」

「やつ……ですね。

明日、模擬戦を挑んで見ましょ。」

これなら、セイバーさんも、立ち直ってくれるかな？

第十話「戦いを終えてーなのは組side『re side』(後書き)

今回は、ユーノへのサーヴァントの説明と

なのはが、アーチャーへの疑いです。

ちなみに、セイバーの決戦フラグは、セイバー強化フラグのもなっています。

最後に、感想をくれた
ヴラド＝ツェペシュ様
ありがとうございます。

第十一話「特訓開始!」（前書き）

最近、色々と立て込んでいた為、遅くなってしまいすみませんでした。

第十一話「特訓開始！」

特訓開始！」

第十一話「

side アーチャー

さて、今日は昨日の約束通りフェイトに魔術回路があるか調べることになった。

結果を言つならば、フェイトには魔術回路があった。

ただ、本数が少なく三本しかなかつたのは、ご愛嬌だ。

にしても、調べた時は既に、魔術回路が開きかけていたな。やはり、違う魔術体系だが、魔力を使うのが同じ分魔術回路が共鳴したのかもしれない。

「それでは、フェイト。次は、魔術回路の起動をしてみてくれ」「うん、やってみるねアーチャー。」セットアップ「起動開始」！！！

フェイトは、目を閉じ魔術回路を起動させたようだ。

やれやれ、もう起動させることが出来るとは……やはり、才能があるな、フェイトは……

その才能を、生前の俺にも分けて欲しいものだ……

「なあ、アーチャー。」

「む、どうしたんだ、アルフ？」

「フェイトは、今のところどうなんだい？」

フェイトの状況を聞きたいのか。

魔術は、命の危険もある分、とても心配そうだな。

「ああ、大丈夫だよ。むしろ、何故魔術回路を一発で起動できるか、
聞きたいくらいだ。」

「さつすが、フェイト 魔法だけじゃなくて、魔術でも才能あるの
かい？」

『さつすが、私の妹だよ、フェイト~~~~~』

まったく、アルフもアリシアも子供だな。

喜びから、走り回って（飛び回って）いるよ。

「アルフ、落ち着け。アリシアもだ。」

『は~~~~い』

「？アーチャー、アリシアって誰だい？？」

む、アルフそこに居る……って、アリシアは幽霊だと語り事を忘れていたな。

あまりにも、普通の人間っぽいからな、アリシアは……

「ああ、大丈夫だ。ただの、幽霊だ。」

「ゆ、幽靈！！！ちょ、大丈夫なのかい！！！！？？？」

「大丈夫だ、たぶん…………無害だ」

「ちょ！！たぶんって！！めっちゃ怖いわ！」

『それに、今の間は！！？ちゃんと言つてよ！！！私は、無害だつて！！！』

まったく、二人ともからかいやすいな。
このからかい易さは、凛以上だな。

「い……めん……二人、とも……ちょっと、静かに……しても
らえるかな？」

突然、フェイトから声が発せられる。

フェイトの方に向くと、かなりの汗をかいたフェイトが居た。

そろそろ、やめた方がいいな。

「フェイト、魔術回路を閉じろ…………」

「う、うん」

そう言って、フェイトは魔術回路を閉じた。

やれやれ、もう魔術回路をコントロールできているよ。

「どう…だつたかな、アーチャー？」

「ああ、完璧にコントロールできていたぞ。

後は、何度もやって慣れるだけだ。だから、今は休め。」

「うん、そうするね。」

フェイトは、そういうて寝てしまった。

今日は、ジュエルシード集めを休んだある一日だった。

side out

side セイバー

今日は、昨日ナノハと約束した通り、キョウヤと模擬戦することになりました。

場所は、高町家の道場で、審判にシロウ（高町）が行います。見学として、ナノハ、ユーノ、ミコキ、モモコ、そしてアリサにスズカ、シノブが来てします。

何時の間にこんな大所帯になつたことやら……

ですが、私のマスターであるナノハに恥をかかせるわけには行きませんね！！！

「それでは、ルールの確認だ。お互い、得物は木刀のみ、どちらが氣絶また致命傷を負うかで勝負は決まる。セイバー君は、魔力放出は禁止それでいいか？」

私たちは、互いに得物に力をいれ、頷きます。

「それでは、開始！！！」

「はあああああああーーー！」

私は、開始の宣言と共に、キョウヤに向かい得物を振り下ろします。キョウヤは、二本の木刀の内、一本でこちらの攻撃を受け流し、もう一本で追撃してきますが、私はすぐさま難ぎに変え迎撃します。けれど、互いの得物がぶつかり合った途端、私の腕に強力な衝撃がきました。その衝撃で、思わず木刀を手放しそうになりましたが、

私は、一度その場を離脱しますが、私の直感がすぐに横に薙げと訴えてきました。

ありがとうございました。

驚きをよそに、ギ田ウヤの追撃に私は、自らの得物で防ぐしか道がないません。

けれど
べつ
!!
??

- - - - - キヨウヤの一閃が、私の剣をすり抜け、私を切り飛ばしてきました。

痛みに耐えながら、立ち上がります。

衝撃を与える斬撃に、瞬間移動をする歩法、防護をすり抜ける一閃

これが、御神流ですか

これらの技を、総合すればアサシンのシバメ返しを上回りますね…

セイバーさん、あなたの剣には迷しかあります。

迷いですか

和は送したと一言付あり。」和は送したと一言付あり。

「迷いのある剣では、俺……いや御神流には勝てません!!」

私は、どうすればいいのでしょうか……

シロウ（アーチャー）とは、戦いたくない……けれど、ナノハのために敵にならなければいけない。

こんな剣では、誰も守る事が出来ない……

「セイバーさん！……」

「ナノハ」

「セイバーさんが、何に迷っているか分かりません。けど、戦う事に迷いがあるんだつたら、

全力全開で行けばいいんです！全力全開、手加減無しで……戦いで話せばいいんです！……」

くすり、ナノハそれでは私の迷いに気が付いているといつてるようですよ。

ですが、その理論なら

シロウ（アーチャー）の敵として戦うのではなく、話すために戦えますね。

それなら、私も戦えます。

まったく、マスターの教えをもううなど、サーヴァント失格ですね

だからこそ、今までの失態の分しつかりと役に立ちますよ……

「キヨウヤ、さつきまで腑抜けた剣だったことを謝罪します。

だからこそ……ここからは、迷いの抜けた私の剣で……全力全開でいかせてもらいます！……」

「ああ、俺も、俺の……いや御神流の奥義でいかせてもらう……」

私は、剣を腰の横に寝かせて構えます。

キヨウヤは、抜刀術の構えをとります。

「はあああああ！……」

「雑……」

私たちは、そのままの体勢で走ります。

「ウイングエア・トラスト！……」

「……」

「旋！……」

私たちの剣が、ぶつかり合います。そして……

「四連続抜刀ですか……いい剣でした。

ですが、まだ甘い。私は、以前三同時攻撃を破った事があります。

「勝者セイバー君！！！」

立っているのは、私のみ。

キヨウヤは、胸を押さえながら片膝をついています。

「まさか、難旋が破られるとはな……」

そう悔いる事はありませんよ、キヨウヤ。

あなたの剣にかける思いは伝わりましたよ。

あなたが、その剣で誰かを守り抜きたいと言つ事が。

それが、御神流の本質なのでしょう。

その考えは、サーヴァントである私にとって、教えを得たいほどです。

……そうだ！！！

「キヨウヤ、私に御神流を教えてくれませんか？」

「なっ！？」

「ふむ、それはいい考え方だな

「と、父さん！？」

「別にいいじゃないか、キヨウヤ。

セイバー君も私たちの家族だ。教えて構わないだろう。」

「……それもそうだな」

「それでは、よろしくお願ひしますキヨウヤ。」

私は、きっとまだまだ強くなれます！！

今度は、マスターであるナノハも、高町家の家族も、親しき友達も、

そしてシロウ（アーチャー）あなたも……

あなたや、ナノハだけではありません。

私も、この剣で正義の味方を目指して見せます！！！

第十一話「特訓開始！」（後書き）

今回は、フュイトの魔術特訓とセイバーの強化が主となっています。
セイバーが、御神流を習つ事を、誰か予想が出来た人がいるでしょ
うか？

最後に感想をくださった。

KOB様、雨季様、普通様
ありがとうございました。

第十一話「守る為の力」（前書き）

やつと、構想が固まつた
約三ヶ月ぶりつて
でも、これが終われば後は、大体は固まつてるから速めに書けそつ
です

第十一話「守る為の力」

第十一話「守る為の力」

「ツ！ナノハ！！」

「うん！行こう、セイバーさん、ユーノ君！！」

夕食後、セイバーさんと特訓をしていたら、急に魔力反応を感じました

この魔力反応は…ジユエルシード！！

幸い、私たちがいる場所は、近くの臨海公園です

ここからなら、強化の魔術を使えば、直ぐに着ける…！！

「行こう、なのは！」

「うん！トレース・オン強化開始！…！」

ユーノ君が、私の肩に飛び乗った瞬間に強化の魔術を使用します
急がないと…！

しばらくして、急に違和感を感じました

「これは、結界！？なるほど、これで一般人に気づかれ無くしたのか…」

「結界の魔術…ううん、魔法なの？でも、これなら全力でいけるね！行こう、レイジングハート」

『はい、行きましょうマスター！』

レイジングハートを起動させます

それから、走っていると直ぐに、フロイトちゃんたちを発見しました！

「見つけた！」

「ツ！バルディッシュ！」

「ジュエルシードシリアル19！封印！」

私のレイジングハートから出るリボンと、フロイトちゃんのバルディッシュから出る黄色い魔力弾が、ジュエルシードを封印します

「なのは、速く確保を！」

「させるとと思ったかい！…」

ゴー・ノ君の相手は、またアルフさんと相手をするみたいなの

「さて、こっちも始めようか、セイバー」

「ええ、修行の成果を見せてあげますよ！アーチャー！」

「やれやれ、ただでさえ強い君が、さらに修行をしたのか？勘弁して欲しいものだ」

やつぱり、セイバーさんの相手はアーチャーさんみたいです
なら、こっちも始めましょう！

「行くよ、フロイトちゃん！」

「前と同じで、ジュエルシードを賭けて勝負です！」

行きまよーフロイトちゃん！！

side out

side アーチャー

やれやれ、いつも見ているが、やはり無茶ばかりする子たちだ
アリシアから、簡単に事情を聞いていたが…まさか、之ほどの思い

とはな

フェイトは、母親であるプレシア・テスタロッサの為。そして、アルフはフェイトの為…か

にしてもフェイトの理想は、俺と似ている…いや、似すぎて…いる適わない理想を、適うと思ひたすらと努力する所が…

フェイトが…自分が、アリシアの偽者だと知つてしまつたら、きっと心が壊れてしまつ…プレシアからは、フェイト・テスタロッサではなく、アリシア・テスタロッサとしか、見られていなかつたんだからな…

ここは、俺が動くべきだ

全ての事情を知つて…いる俺が…

その為なら、俺の力全てを使おつ…例え、この身が消えよつとも…

「さて、行くか？セイバー」

「ええ、今度こそあなたに出し抜くほどの余裕は『えませんよ、シロウ…!』

まつたく、俺もあの時は運よく出し抜けただけだつたんだがな…幸運Dの俺が、あんな幸運があつたのは、これを見越してなのか？

「では、君の敗北に賭けるとしようか」

「ならば、私はあなたの敗北に賭けるとしましょ…」

声に出さず、口の中だけで呟くよつて言いつ

（強化開始…）

昔から、使い続けた俺だけの呪文…いや、セイバーのマスターの高町…なのはも同じ呪文を使つていたな…

確かに、あの子の師匠は衛宮…士郎だつたな…まったく、死んでもなお俺に嫌がらせするのか、アイツは…（アーチャーは、この世界に来た士郎が死んだ事を、調べてあります）

「行きます！ふつ
「せやつー」

思考中断！仕掛けてきたか！

セイバーの強力な魔力の乗った一撃が、俺に迫ってくる
だが、俺はそれを受け止めずに干将・莫耶でいなす
くつ、相変わらずの馬鹿力だ

「…シロウ？今、変なことを考えませんでしたか？」
「い、いや、そんなことなど考えてないぞ、セイバー」

鋭い…セイバーの勘は、相手の思考内の悪口も見抜けるのか？
だが、俺だって負けられない理由があるんだ！

俺は干将・莫耶で切りかかる

本来なら、俺の戦闘スタイルはカウンターだが、守つてばっかでは
いられない！

「はあ！
「なつー？くつ、せあー！」

普段俺が、カウンター重視のためだつたから、いきなり攻められた
のは驚きだつたのだろう
だが、その決定的な隙を見逃すわけにはいかない！
それからはラツシユを繰り替えす！
防がれては次、防がれては次と、セイバーに攻める隙は与えない！

「くつ、ならばーはあ！ー！」
「ぐつ…」

な、なんだ今の一閃は！？

今までの一撃とは、まったく違う…腕に直接振動が伝わってくる
だが、まだ未完成なのか、伝わる衝撃は小さい
もしこれが、さらに強ければ、確実に片腕をやられていた…！

「ふう…やはり、難しいですね」

「くつ…それが、さつき言っていた修行の成果なのか？」

「ええ、これが私の…いえ、私が教えを貰っている護る為の剣、御
神流の技・徹です」

「やれやれ、さらにやっかいな技を…しかもこれで、未完成なのか
！？」

恐らく、この世界で師事されている技だろうが…この世界の人間は、
アサシン・佐々木 小次郎のように技だけで宝具クラスの技を使える
人物がいそうで怖いな…

「それでは、行きますよ！」

「来い！セイバー」

私も、この力をフェイトを護る為に使おう…

第十一話「守る為の力」（後書き）

今回は、次元振が起こる戦いのアーチャー & セイバー side の戦いでした

久々だからか、内容が薄い…

第十一話「記されたもの」（前書き）

……戦闘シーンを書くのが難しいです

第十一話「託されたもの」

第十三話「託されたもの」

「トース・オン
投影開始！」

なのはは、自身の使い慣れた双剣を投影し、戦闘の準備をする
フェイトも、自身のデバイスをデバイスフォームからサイズフォー
ムへと変え、なのはを迎撃つ気だ

「…」の前は、あなたに翻弄されたけど、今回はそろは行きません
「もう… フェイトちゃん、あ・な・たじやなくてな・の・は！ だよ

戦闘前に、そんな軽口を言ひ合っているものの、一人はお互いの行

動に注意を払っている

さつきから、様子見だが…お互に、走りだした
フェイトは、上段からバルディッシュを振り下ろし引くように切り
つけてくる
なのはは、それを迎え撃つように下段から干将・莫耶で切り裂こう
とする

そして、お互いの武器がぶつかり合い、金属音が鳴り響く
均衡は一瞬、互いにそのままバック・ステップで距離を取り、また
攻めていき、何度も何度も切りあって行く

なのはは、士郎が昔兄である高町 恭也や父である高町 士郎との
模擬戦を何度も見た事があり、その記憶を頼りにその戦闘法を編み
出している

最近では、よくセイバーと特訓をして改善などもしているが、なのは
は自身、士郎の戦い方があつていて。なのはは、魔法の才能がある
が、元々運動は得意な方ではなく、強化の魔術を使わなければ、一
般の子供レベルしかない。そのためか、武術の才が無く、一流には
決してなれない。よくて、二流止まりだ

だからこそ、なのはの戦闘スタイルは、士郎の戦闘スタイルと同じ
になってしまっている

それに対し、フェイトは今までリースという使い魔から修行を受け
ていたが、あくまで魔法が主体

接近戦は、初心者以上の領域でしかなかつたが、アーチャーとの特
訓のおかげで、今ではかなり腕を上げているが、今だになのはを越
すレベルでは無い

だが、アーチャーと戦略を立てたお陰で、何とかなのはと互角に戦
つている

フェイトは、スピードが速く、高速戦闘を得意としているので、田
はいい方だ

なので、その利点を大きく利用し、なのはの斬撃を捌いていく
けれど、小型の武器を扱うなのはと中型の武器を使うフェイトでは、

どうしても手数ではなのはが上である。そのため、フェイトでは捌ききれない所が致命的である

なのはの干将・莫耶は、怪我をしない為に刃を潰してあるが、それでも直撃すれば危険だ

フェイトは、捌きいれないと理解した時は、高速魔法の『ブリッツアクション』で回避している

けれど、さすがに接近戦では勝てないと悟ったフェイトは、飛行魔法を行使して上空へと逃げる

「あつ！投影破棄^{トレイス・アウト}・レイジングハート、お願^イ！」

『待つてました！スタンバイ・レディ・セットアップ』

なのはは、直ぐに投影を破棄し、デバイスを起動する

そのまま、飛行魔法を展開し、上空へと逃げたフェイトを追いかける
「…接近戦では、あなたに分がありますが、魔法では負けません！」「だから、な・の・はだつてば！でも、私も負けないよ！あれから、うんと特訓したんだから！」

一人の周りに、同時に3つの球体が現れる

「行つて、『ディバインショーター』！…！」
「迎え撃て、『フォトンランサー』！…！」

同時に魔法を放つ

なのはの誘導弾の『ディバインショーター』とフェイトの直射型の『フォトンランサー』

なのはは、フェイトの『フォトンランサー』を紙一重で避け、フェイトはなのはの『ディバインショーター』を白煙のスピードで振り切る

だが、いくらなのはが魔法の初心者でも、誘導弾に意識を集中すれば2個までなら操る事ができる

なので、なのはは振り切つて今だ油断しているフェイトに、『ディバインシューター』で襲い掛かる

フェイトは、意識を集中しているなのはを見て、好気だと思うが、今まで戦闘経験の高い動きを見せていたなのはが、急に意識を集中しだしたのに疑問を抱く。そして、直ぐになのはの狙いに気づいたなのはの狙いに気づいたフェイトは、急いでその場から離れ地面に立つと、自分が今までいた場所に2つ誘導弾が襲つて来たが、目標に当たらず、そのまま近くのビルにぶつかって消えてしまう

(危なかつた…直ぐに気づかなかつたら、誘導弾の餌食になつてた)
「(にやは…さすが、フェイトちゃん…私の狙いも直ぐに気づいちゃうんだ…でも、あの位置だつたら…)これなら…『ディバインセイバー』…！」

なのはは、直ぐにブーメランと同じ軌道をする魔力斬撃魔法の『ディバインセイバー』を展開し、フェイトへと飛ばす
放たれた、4つの『ディバインセイバー』は、フェイトへと向かつて行くが、フェイトはそのまま地面の上で動き、回避していくが、当然動きが止まってしまう

「ツ！ いつたい、何が…あつ！？」

突然、何かに引っ張られる感覚の性で進めなくなつたフェイトは急いで状況の確認をすると、自分のマントになにやら黒い何かが刺さつていた。それは、マントを貫通し地面に深く刺さつていて、動く事が出来なかつた

そのまま破つてしまいたいが、破れるが、少し時間が掛かりそうだ

「掛かつたね、フェイトちゃん！行くよ、『ディバイ——ーン』……」

「くつ、『サンダー』……」

まだ拘束魔法である『バインド』を使えないのは、投影でクナイを投影し、『ディバインセイバー』を放つと同時に、フェイトの軌道上にクナイを放ち、マントに貫通させたのだった

本来なら、難しいが、空間把握能力を保有するなのはならではの技だ

そして、擬似バインド状態のフェイトに対し、なのはは得意の砲撃

魔法の準備をする

フェイトも、今此処でクナイを抜くよりも、なのはの砲撃魔法を迎撃するほうが先決だと悟り、砲撃魔法の準備に移る

「バスター——『！——！』

「スマッシュヤ——『！——！』

お互いの放つ砲撃がぶつかり合う

勢いよく放たれた砲撃は、遅れて放たれたフェイトよりに拮抗を見せているが、少しづつ押し返されてるようだ

けど、なのはも負けじと魔力を注ぎ込み拮抗させる

二人は、お互いの信念の為、負けないために魔力を注いでいき全力でぶつかり合う

けれど、そんな二人に邪魔が入る

「え、何！？」

「ツ、しまった！」

いきなり、大きな魔力を感じた

その発生源は……先ほど封印したはずのジュエルシード
どうやら、一人の魔力を浴びて、暴走したようだ

「バルディッシュ、部分リリース！」

フェイ特は、バルディッシュュにバリアジャケットの一部の解除を命じ、マントを消す
動けるようになったフェイ特は、そのままジュエルシードに向かう
なのはも、負けじとジュエルシードに向かう
ジュエルシードの近くまで来た二人は、デバイスをジュエルシードへと向けるがぶつかり合ってしまう
そして、ジュエルシードはその魔力の一部を解き放つてしまつた

「わやつー。」

その大きな魔力の性で、一人は吹き飛ばされる

幸い、元バイスが瞬時にハリアーを張ってくわだおかけて、二人に外傷は無いがデバイスたちは輝が入ってしまい、使用できなくなってしまう

無理をすれば、使用できるがそんな事をすれば砕けてしまつ可能性がある

「...」

「待て、フェイト！今は危険だ！」

放してアリサヤ!! 早く封印しないと!!!

だから 待てどいしてしまった! 少しはアレが落ち着くのを待

フェイトはアーチャーに掴まれ、行くに行けない状況になってしま
うが、今はそれが最善の手だろう

今行けば、また強力な魔力で吹き飛ばされてしまう可能性があるならば、落ち着くのを待つたほうがいい。または、少しでも弱まる

方がいい

アーチャーは、そのままアルフに防壁を張らせる

「なのは、こっちも今は待った方がいい！」
「そうです、ナノハ。今行くのは危険です」
「で、でもそうしよう！ レイジングハートが…
『すみ… ません… マスター』

レイジングハートは、さつきの性で壊れかけてしまっている
バリアジャケットだつて、今にも解けそうだ
向こうは、アーチャーがいるから次の振動を防げるだろ？ が、こっ
ちはユーノだけじゃ心もとない

「ナノハ、私が魔力放出を全開にして、アレを緩めます。ですので、
ユーノと共に、待っていてください」
「セイバーさん！ そんな事したら、セイバーさんが危ないよ…」

セイバーは、自身がなのはたちの前に出て魔力放出を全開にし、盾
になろうとするが、なのはに止められる
いくら、対魔力の高いセイバーでもあんな超高密度の魔力を浴びれば、危ないだろ？

(考てるんだ、この状況で一番いい手を…士郎お兄ちゃんなら、
きっとこんな事も何とかできるんだから…)

なのはは、士郎の様に何でも投影できる訳ではない
今なのはが出来るのは、干将・莫耶と簡単な剣闘類などの投影ぐら
いだ

それでも、なのはは考える。そして、一つの希望を見つけ出す

(そうだ…士郎お兄ちゃんが、私に託してくれたあの宝具がある！でも…魔力が足りない…ど、どうしよ…私のリンカーコアの魔力を魔術回路の魔力に変えれば…)

以前、ユーノが行つてくれた魔法の講習で、魔法の使う魔力が発生する動力源が、リンカーコアと呼ばれるものから出来ると聞いた。そして、ユーノに簡単にリンカーコアの魔力と魔術回路の魔力を比べてみてもらつたところ、魔力の質が違うらしい
例えるなら、水と油。同じ液体でも、決して交わらないもの
そんなものを、混じらせれば何が起こるかはわからない

(あれ…魔力を変える……そうだ…)

「ユーノ君、セイバーさん。私がやります！」
「なのは！？」「ナノハ！？」
「大丈夫、きっと何とかなります！」
「でも、なの「ユーノ、ダメですよ」なんで止めるんですか、セイバーさん！！」
「ナノハの頑固差は、士郎譲りですので、きっと止めれないでしょう。危険になつたら、私が止めます」
「……はい」

(ありがとうございます、セイバーさん)

なのはは、ユーノの前に立ち、神経に集中させる
その間に、ユーノはなのはとセイバーを包むように障壁を作る

(魔術回路とリンクカー「ア」を繋げるラインに接続…ついで、やつぱり負担がかかるよ…)

なのはは、魔術回路をリンクカードアを繋げるラインを接続する。もつとも、ちゃんと流れないよう、に、関所のよつたものが、無意識に

出来てしまつて、流す事は出来ていらない

元々、なのはの魔術回路にはなぜか、分岐点があつたそれを士郎に知らせ、調べた所、どうやら別の何かに繋がつていて聞いた覚えがあるなのは

ユーノとの講習と魔法の使用で、それがリンクカードアである事を知つた

昔、その関所のよつた所を開こうとして、えらい田にあつた覚えもあるのだったが、今は違う

(次に、その関所のよつた所を開くと同時に、通る魔力を変換させる！)

そり、なのはの属性が変換だからこそできる荒業…それが、魔術回路とリンクカードアの同一化

なのはの属性である変換は、自分の魔力に関するものを変える」との特化している

そのため、自身の魔力を魔術回路とリンクカードアの魔力を合わされるものに変換することが出来るのだった

これにより、なのはの魔力の総数は伸び、魔術と魔法を同じもので使えることになる！

「トレース・オン
「投影開始…」

そのまま、田を瞑り設計図を思い浮かべるが、それは鮮明で全ての工程をカットできている事に、なのはは驚くのだった

それは、まるで既に自分の半身のようだった

なのはの投影が終わると同時に、まるで待っていたかのよつこと魔力の波を飛ばすジュエルシード

その波は、全てを飲み込む津波のようだつたが、今なのはには関係
が無かつた

「あれは……私の……」

「なつ！ ジュエルシード以上の魔力を秘めてるのか！？」

セイバーとコーンのそんな咳きを聞いてくるが、なのはは聞こえないのか無視してその名を叫ぶ！

「全アヴァー遠き理想郷――！」

そのとき、全てを包み込むよつた黄金の輝きがなのはたちを包んだ

第十一話「託されたもの」（後編）

……なのはの設定、元からそういう考えてたけどかなりやつすがだった
気がします…

これじゃ、変換の属性がかなりのチートになりそうですね…

最後に感想を下さった

雨季様、t o k k i - 兄様

ありがとうございます！！

第十四話「フレシア・テスタークロッサ」（前書き）

テストも終わり、安心だつぜ！！

4月6日・フレシアさんsideを追加しました

第十四話「フレシア・テスタークサ」

第十四話「フレシア・テスタークサ」

side アーチャー

昨夜のジュエルシード争奪戦により、フェイトの『バイクス』であるバルディッシュは故障しかけてしまった

今は、フェイトとアルフと共に、休養中。バルディッシュも、今日の午後には直ることだ

俺は、一人歩きながら、昨夜のあの後の事を思い出す…

『^{アヴァロン}全て遠き理想卿！……』

その声と共に、辺りが黄金の光に包まれた

『な、なんなんだい！あの馬鹿魔力はつ……？』

『……なんだろ、すごく暖かい』

まさか、あの子が”^{アヴァロン}全て遠き理想卿”を持つているとは…
あの子は、必死に守っているのに、俺はどうだ?
障壁をアルフにまかせて、補助しかしていいじゃないじゃないか！—

『アルフ、私も全力を出す。下がっていたまえ』

『あ、アーチャー？ど、どうしたんだい！？』『アルフ！』フェイト

?』

『今は、アーチャーの指示を聞こ？』

『わ、わかったよ…アーチャー、頼むよ？』

『まかせておけ』

俺は、フェイトたちの前に立ち、精神を集中する
そして、

『— I am the born of my sword (体は
剣で出来ている) …』

目も前の恐怖を、遮る盾となる！
あの子のように、全力を尽くそう！

『ロードアイアス 煙天覆う七つの円環！……』

あの子の盾には劣るが、私の丘にある最強の盾を張ろう……。

私が、アイアスを張ると同時に、またジュエルシードが暴走を起こす
だが、そんな魔力暴走など、宝具であるアイアスを突破する事など
できん！！！

結果は、見なくても解りきっていた

私は、魔力が収まると同時に、アイアスの投影を破棄し、新たな宝
具を投影する

『トレース・オン
投影開始！』

新たに投影するのは、あらゆる魔術を断つ槍

『破魔の紅薔薇！！！』

私は、ゲイ・ジャルグ破魔の紅薔薇を操り、ジュエルシードを上空に飛ばす
これに触れた間は、魔力を流す事はできない……つまり、これで触れ
れば、ジュエルシードを封じる事ができる
上空に飛ばされ、落ちてきたジュエルシードを掴み、フェイトの元
へ戻る

『待てっ！ジュエルシードを返せ！』

『つつ、返せだと？残念だが、それは出来ないな。何、危険視しな
くてもいい。これは、私が責任を持つて預かっておく。行くぞ、フ
ェイト。アルフ。』

『え、あ、う、うん！』

『あいよー。』

あのフェレットも泣きが、叫んでいるが無視をする

……『ひうやり、セイバーのマスターは、全て遠き理想卿の投影により氣絶しているようだな

私たちは、そのまま拠点であるマンショアヴァロンンに向かった

ふう、あそこまで自身に嫌気が出たのは、過去の自分を殺そうとしたとき以来だつたな…

『アーチャー、大丈夫?』

「ああ、大丈夫だよ。アリシア、少し自身に苛立ちを持つてただけだ」

まったく、アリシアにまで心配されるとはな…
フェイトとアルフにも、心配をかけてし… 今夜は、ご馳走でも振舞つてやるか

* * * * *

あれから、俺（とアリシア）はスーパーで食材を買い、喫茶翠屋という場所でショーケースを買って帰った

帰つてみると、既にフェイトとアルフは起きていたようだ
まずは、昨日のことを謝ったが、フェイトもアルフもそれほど気にしていなかつたようだ

ただ、さすがにアイアスなびのことは聞かれたが…
それから、フェイトと共に食事を作り、サボつてゐるアルフを無理やり働かせていた

そして、今はさつと買った翠屋のショーケースを持って、マンションの屋上にいる

「それで、今回は随分早いが…もうジユエルシーの探索に行くのか？」

「うん、違うよ。今日せ、これから母さんにてこに行くんだ」

…フェイトの母親か

アリシアから、聞いたが…あのことは黙つておいたほうがいいな

(『アーチャー…』)
(『どうした、アルフ?』)
(『フェイトにもしもの事があつたら、頼んでいいかい?』)
(『ああ、もちろんだ』)

やはり、虐待を受けているのか？

アリシアからは、フェイトとアリシアについて、フレシアがフェイトをどう思つてゐるか?、くらいしか聞かされていないからな…
フレシア・テスタークサが、フェイトを嫌つてゐるしか知らないからな…

「? アーチャー、アルフ、どうしたの?…さつきから黙つてて?」
「いや、なんでもないぞ、フェイト。さ、早く行こう」
「うん。バルディッシュ、ごめんね?また、負担をかけちゃつて…」

『構いませんよ、マスター』

「ありがとう。 次元転移、次元座標 876C 4419 33

1
2
E
6
9
9
3
5
8
3
A
1
4
1
3
7
7
9
F
3
1
2
5
o

「開け、誘いの扉。時の庭園の主、ブレシア・テスター・サのもとへ

闪光が走り、思わず目を瞑る…そして

۱۷۰ ...

「す、すまん… ビ�やら、少し酔つたみたいだ…」

もう、酔ってしまった。

まさか、こんな事になるとはな…

「ああ、そりや次元酔いだね？慣れてないと、時々酔つてまうんだよ」「それじゃあ、アーチャーはここで休んでて。私とアルフで行つてくるから」

(『すまん、アルフ…何かあつたら、念話してくれ』

(『仕方ないさ、しきかり休んでなよ?』)

(『助かるよ、アルフ』)

俺は、フェイ特とアルフが遠ざかるのを見ていった事しかできなかつた

「わあ～、ここに戻つてくるのも久しぶりだ～！～！」
「……な、なんでいるんだ、アリシア？」

『むう、私だつてこここの家族だよー、だー!』

『どうやら、俺たちの次元転移に付いてきたみたいだな……いや、ここは”憑いてきた”のほうが合ってるか

『何か、変なこと考えてない?』

『い、いやー別に何も考えてないわーーー!』

おかしい…

一瞬だが、かなり懐かしい赤い悪魔を思い出しだぞ?

(『アーチャーーーお願いだよ、フェイトを…フェイトを助けてくれーーー!』)

「アルフ!ーーー?」

急に来た、アルフからの念話を受け取り、俺は走り出す
いつたい、何が起こったんだ!!?

『アーチャーーー!つちだよーーー!』

「助かるーーー!」

アリシアに先導されながら、俺は時の庭園を駆ける
そして、一つの大きな門に着くと、そこにアルフが泣き崩れていた

「アルフ!ーー!」

『アーチャーーー!フェイトが、フェイトがあの鬼婆にーーー!』

鬼婆というのが、誰かは知らない。だが、フュイトを傷付けるものは許さん！

「— I am the born of my sword（体は
剣で出来ている）… 偽^{カラド}・螺旋劍^{ボルグ}！」

俺は、瞬時に黒く塗りつぶされた弓と螺旋状の矢を投影し、放つそれにより、目の前の巨大な門を破壊する

「何事！？」「
「アーチャー？」

破壊された門から覗く光景は、最悪な物だった
バインドで両腕を縛られ、つるされたフェイトには無数の鞭で撃たれた傷がある

「…貴様が、フレシア・テスタロッサだな？」
「…ええ、そうよ。私が、この時の庭園の主、フレシア・テスタロッサ…あなたは？」
「自己紹介が遅れたな…私のことは、アーチャーと呼びたまえ。さて、我がマスターであるフェイトを返してもらおうか？」

瞬時に、干将・莫耶を投影し投擲する
投擲さてた干将・莫耶は、宙を舞いバインドを切り裂いた
今まで、自身を支えていたものが無くなり、崩れ落ちるフェイトを
直ぐにアルフが支える

「アルフ、フェイトを連れてこの場を離れる」

「…アーチャーは、どうするんだい？」

「なに、俺にはやることがあるんだ」

「…無理するんじや、無いよ」

「善処しよう」、そう呟くと同時に、アルフは走り去っていく
…さて

「先に言つておく、フェイトとアリシアを同一視するのは止めろ」「ツ！何故あなたが、アリシアのことを…」

俺の言葉に、怒りを持ったのか、いきなり『フォトンランサー』で
攻撃してくる

「フッ！」

だが、俺はバインドを切り裂き、戻ってきた干将・莫耶を手にし、
切り裂く

「くっ、あんな人形を！私のアリシアと同一視するですって…？ふ
ざけないで…！」

「…なに、こちらはそちらの情報を得ていてね。知っているぞ？事
故で死んだ、娘であるアリシア・テスタークサを生き返らせるため
に、クローン技術で生まれたのがフェイトだと…先に言つておく、
死んだ者は生き返れん！不可能な理想に縋りつくな…！」

死者の蘇生なんて、聖杯でも無理なことだ！

俺は、射撃魔法は干将・莫耶で切り裂き、砲撃魔法はかわしながら
叫ぶ

「五月蠅い！あなたなんかに、何がわかるというの……」「そんな物知るかつ！今を認めず、過去に囚われた貴様の気持ちなど……！」

プレシアは、昔の俺に似ているが、決定的に違う過去に囚われているのは確かだ。だが、過去を取り戻そうとするプレシアに対し、過去の自分を殺そうとした俺。やれやれ、この親子は、親子揃つて俺に似ているとはな……

「行くぞ！ プレシア・テ・黙目…………！」 フェイト！ ！」

しまった、今の話を聞かれたか？

「アーチャー、お願い！ 母さんと、戦わないで！！！」
「むっ！」

くつ、令呪を使われたか……

内容は、プレシア・テスター・ロッサとの戦闘を行わないことか……仕方ない

「プレシア・テスター・ロッサ、これで失礼をせてもらおう」
「待ちなさい……」

プレシアの魔法を避けつつ、俺はフェイトを抱えその場を離れる。フェイトのようすから、どうやら聞かれて無いようだな……助かった途中で、アルフとも合流し、俺たちは時の庭園から脱出した

side out

side プレシア

「待ちなさい……」

あの男は、私の静止を無視してそのまま走り去ってしまう。
魔力反応は……消えたわ。もう地球に行つたのね……

「あの男……いったい、何処でアリシアとフェイトの事を知ったのよ……それにどうして、フェイトの事を知りながら一緒にいられるの?」

最近、いつも考えてしまう、人形のことを。

フェイトも私の娘ではないかと……でも、否定しなければいけない。

私は、フェイトの母親じゃない……私は、アリシアの母親なのだから……
私は、アリシアの母親……アリシアは私の娘……フェイトはアリシアの代わりとして造った人形……

でも、何故か心中で引っかかるてしまう……まるで、心の奥のどこかがその関係を拒むように……

「ツー、ゴホッ、ゴホツ……」

どうやら、私の命ももう永くもちそうにないわね……
あの人形に、もつと急がせないと……

でも、あの男がジャマになるわね……傭兵でも雇つた方がいいわね……

s i d e o u t

第十四話「フレシア・テスタークサ」（後書き）

今回は、アーチャーとフレシアの初邂逅でした
今回の件で、フレシアに敵視されたアーチャー… フロイトを守りき
れるのか！？

なんか、アーチャーが主人公っぽくなってきたな…
そして、感想にあつたのですがフレシアさんの扱いが雑という意見
をもらい、読み直しましたが確かに雑でしたので、フレシアさん s
ideを追加しました

最後に、感想をくれた
グラムサイト2様、tokki -兄様、雨季様
ありがとうございます

第十五話「現れる第三勢力」（前書き）

今回は、いよいよKYOU... ゲフンゲフン... クロノの登場ですー！
後、前回から念話による念話を

（『』

と、しました

第十五話「現れる第三勢力」

第十五話「現れる第三勢力」

s i d e なのは

目が覚めると、私の部屋で寝ていました

セイバーさんとユーノ君から聞くと、私が”全て遠き理想郷”を投影し、真名解放が出来たけど、そのまま気絶しちゃったみたいです。私が、気絶している間に、アーチャーさんが色々な宝具を投影して、ジュエルシーードの暴走を止めたみたいです。

その際に、アーチャーさんが言っていたのはロー・アイアスとゲイ・

ジヤルグだ、そうです

熾天覆^{ロード・アイアス}う七つの円環は、士郎お兄ちゃんが良く使つてた防御用の宝

具の筈です

どうして…アーチャー、熾天覆^{ロード・アイアス}う七つの円環を使えるの？

熾天覆^{ロード・アイアス}う七つの円環は、ギリシャの英雄のアイアスの盾です。これだけ見れば、アーチャーさんの真名はアイアスさんですけど…アーチャーさんは他にも干将・莫耶も使えます。干将・莫耶は中国で作られた双剣ですから、一致しません…謎は深まるばかりです

* * * * * * * * * * * * * *

「ごめんね、レイジングハート…」
『気にしないでください、マスター』

私の目の前には、ボロボロになつてゐるレイジングハート（待機形態）があります
…私が、もつとしつかりしてれば、レイジングハートはこんなことにならなかつたのに…

「大丈夫ですよ、ナノハ」

「セイバーさんの言う通りだよ、なのは。レイジングハートなら、今日の夕方頃には直つてるよ！」

「うん… ありがとう、セイバーさん。ゴーノ君。」

そうだよね、落ち込んでたら何ともならないよね
よし！こんな失敗が起きないように、頑張んなきゃ！

それから、私は学校に行き、放課後にセイバーさんとゴーノ君と一緒に会話をしました

その頃には、レイジングハートはもう直つて安心したの！

そしたら、近くの海鳴臨海公園でジュエルシードの反応がしました
私たちは、急いで海鳴臨海公園へと向かいました

「つたぐ…めんどくさいね、コイツ…生意気にバリアなんて張つて
るよ!」

アルフが叫ぶ

今回は、ジュエルシードは気に取り付いたらしい姿をしている
…やれやれ、商店街を歩いていた時に久しく見たドラゴン エスト
の人面樹を思い出すな

けど、こっちには顔が無い分不気味じやない、か

「フヒイトちやん! アルフさん! アーチャーさん!」

「くつ、向こう側ももう来ちまつたのかい! !」

セイバーたちも来たようだな…

「アーチャー、ここは一時休戦しませんか?」

「ああ、俺もそれを提案したかつた所だ」

どうやら、セイバーは俺と同じ考え方のようだが、
何故だか知らないが、嬉しく思える

「ちょ! アーチャー! ? 正氣かい! ?」

「ああ、正氣だぞ、アルフよ。ここは、共闘したほうが、確実に封
印できるからな。どうだ、フェイト?」

「私は…アーチャーの意見がいいと思つた」

「フェイト! ! ?」

「セイバー、こちらは問題ないぞ」

セイバーもどうやら、向こう側で話し合っているようだが、マスターである高町なのはは、どうやら直ぐに賛成してくれたようだ

「ええ、こちらも構いません。終わったら、ジュエルシードを賭けて決闘などどうでしょう？もちろん、ジュエルシードが暴走しないようにしてからで」

「クッ、ああ。それが最適だな」

俺は、セイバーにそう応えながら弓と矢を投影する
封印するには、まずはあのバリアを突破しなくてはいけないからな

「アーチャー、私があのバリアを切り裂きますので援護をお願いします」

「解っているさ。フェイト！高町なのは！セイバーが、バリアを切り裂いたら一斉に封印しろ！アルフとユーノは、一人に危害がおきないようにカバーを頼む！」

「うん！」「はあ…あいよ…」「確かにそれが最適ですね…はい！」

「それでは、いきます！」

確認が終えたところで、セイバーが人面樹もどきに突っ込んでいく
人面樹もどきは、セイバーの接近を防ぐために、根っこで襲い掛かるが、無駄だ！

「はあっ！」

根っこには、俺が矢で射る

矢は、魔術的作用は施していないので、威力は低いが、何発も射れば根っことき破壊できる！

「さすが、アーチャーですね…はああ…！」

セイバーは、自身の持つ聖剣で、人面樹もどきのバリアを切り裂く
だが、その際にどうやら人面樹もどき」と切ったようだがな
セイバーは、直ぐに後退し

「ナノハ！フェイト！今です…！」

二人へと、指示を仰ぐ

「うん！行くよ、レイジングハート！」　「は、はい！バルディッ
シュ！」

『はい！ディバインバスター…！…』　『解りました。サンダー
スマッシュヤー』

二人の放つ、封印（という名の砲撃魔法）が、人面樹もどきへと放
たれる

…恐ろしい光景だな。たつた9歳の少女が、之ほどの威力を出せて、
なおかつその一撃を浴びるとは…何気に、一人の息は合っている
し…一人なら、仲の良い友達になつたんじゃないかな？

「アーチャー、お願ひします」

「ああ。トレス・オン投影開始…これで、大丈夫だらう。念のため、アルフと
フェレットもどきもこちらに来てくれ」

「あいよ」

「は、はい…って、僕はユーノですよ…さつき、ちゃんと僕の
名前を呼んでくれたじゃないですか…！」

「なに、ノリだ。気にするな」

俺は、マグダラの聖骸布を投影し、ジュエルシードを包む。これで、魔力を浴びて、暴走することはないだろう

二人とも、こちらに来てくれて…これでよし…

「それじゃ、行くよ、フェイトちゃん！」

「…行きます」

二人の決闘が始まる

フェイトも高町 なのはも、いきなり接近戦を繰り広げようとすると… ムツ、なんだいきなり魔力反応が

「ストップだー！」での戦闘は危険だ

いきなり、二人の前に一人の少年が現れる
見た目、フェイト達と同年代か？

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ！詳しい状況を聞かせてもらおう」

「時空管理局だつてーくつそ、引くよーフェイト…！」

「う、うん」

（ほお、この少年が時空管理局員か…

次元世界の正義の味方…的な話を聞いたが、強大な組織だ。恐らく、裏では犯罪行為をしている輩も否めないだろう）

アルフがクロノとか言う少年に威嚇射撃を放つたな
フェイトは、そのまま聖骸布で包んであるジュエルシードのもとへ向かう

クロノは、魔力弾を放つな…つてなに…？

（なつーこの斜線だと、フェイトに直撃だぞ…！戦闘を止めるのに、

警告も威嚇射撃もせず、直撃を狙う阿呆がいるのか…？）

俺は、干将・莫耶で直ぐにフェイトに向かってくる魔力弾を切り払つ

「あ、アーチャー…？」

「行け、フェイト！俺が時間を稼ぐ！なに、単独行動は弓兵の得意分野だ。必ず戻る！」

「で、でも！」「いいから行け！」…解つた、かならず帰つてきてね！」

「もちろんだ…ああ、一つ聞き忘れていた

「えつ、何？」

「時間を稼ぐが…別に、アレを倒してしまつても構わないだろ？」

俺のそんな発言に、フェイトはきょとんとしたが、直ぐに笑つて答えてくれる

「うん、お願ひね！」

「ああ、任せておけ！」

俺は、一いちに怒りを向ける馬鹿に向き直つた

だが、この時まだ俺は気づいてなかつた

無防備なフェイトを攻撃し、海鳴市に不法侵入したあげく、訳も分からぬ事を言つて場を支配する少年に怒りを見せる少女がいる事を…

第十五話「現れる第三勢力」（後書き）

なのは視点よりも、アーチャー視点のほつが書きやすい…

最後に感想をくれた

グラムサイト2様、tokki -兄様

ありがとうございます！

第1-6話「管理局との戦い」（前書き）

すみませんでしたあああ！

こんなに投稿が遅くなってしまいました。どうしても、書いているとクロノをなのはが完全にフルボッコになってしまい、なのはとフエイトのバランスは合いませんでした。そのせいで、投稿が遅くなつてしましました

side なのは

「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう?」

アーチャーさんのその言葉は、まるで聖杯戦争のバーサーカーのときに行つた台詞の同じでした。

でも、今の私はそんなこと関係ありません…

ユーノ君からは、時空管理局はあらゆる次元世界を護るために組織…そんな組織が、無防備なフェイトちゃんに威嚇射撃も無く、そのまま攻撃するなんて許せない！

少し、おしおきが必要なの…

「アーチャーさん…少し、変わつてくれませんか？」

「あ、ああ…（な…何故だ、今のある少女からかの赤い悪魔を幻視させられるぞ！？）」

アーチャーさんの前よりも前に立ちふさがり、時空管理局の人の前に立ちます。

「君…これが、公務執行妨害だつてわかつているのか！？」

「つうん、私は正規の魔導師じゃないから解りません。でも…」

私は、あくまでユーノ君のお手伝いとして魔導師になつただけ…管理局の知識なんてありません。

でも、ユーノ君から聞いた情報があります！^{カード}

「ここは、時空管理局外なんですよね？だつたら、ここではあなたに権限はありませんよ？」

「ぐつ…だ、だが、ロストロギアを放つて置くわけには行かない！だからこそ、ボクたち時空管理局の出番なんだ！！」

「そう…ですか。でも、大丈夫ですよ？海鳴市は、私たち魔術師の管轄ですから」

「なつ…？魔術師だと…この世界には、魔法文化は無いはずだ！」

「確かにこの世界には『魔法』はありませんよ？」

「くつ……詳しく述べてもらおつか……」

舌戦では、私の勝ちです。

こうみえて、お父さんと士郎お兄ちゃんから色々と教わってたんだから！

それに、私には対男の人用の最強の武装があるんだから！

「トース・オン
投影開始！」

「「なつ！？」」

私が投影した武装を見て、時空管理局の人とアーチャーさんが驚きます。まあ、それもその筈ですね。だって、私が投影したのは、魔力反応の無いただの布に見えるから。

「魔力のこもっていないただの布だと…馬鹿にしてるのか！」

この布は、マグダラの聖骸布…

普段はただの布でしかないけど、キーワードと一緒にこの布を振ることで、男の人を拘束する布。

確か、士郎お兄ちゃんは、カレンさんつていう人に何度も使われたつて聞いたな。

つと、無駄な思考はここまでにしないと。

時空管理局に人も、もう臨戦態勢をとつてるし。

「行きます！援護してね、レイジングハート！」

『イエス・マスター。直射型魔力弾が4発、左右から来ます』

「うん！」

レイジングハートの言つとおり、左右から2発ずつ魔力弾が飛んできます。

解析の魔術を使わなくともわかるくらいの圧縮された魔力弾を前進しながら、干将を投影して必要最低限の魔力弾だけを切り裂く。

「魔力弾を物理的に切り裂くだと…」

「確かに、私やフェイトちゃんより速いし、こめられてる魔力量も大きいですけど…」この位なら、士郎お兄ちゃんの特訓のほうがキッイです！」

「くつ…なら、手加減はもうしないぞー！」

放たれる魔力弾のスピードがさつきよりも速くなっています。

…やっぱり、さっきまでの手加減だったんですね。

くつ…このままじゃ、近づけない！

捌ききれず、魔力弾が一気に数発と私に当たりそうになります。ま、まずい！

だけど、その魔力弾は私に当たることは無かった。何故なら、その魔力弾は数本の弓矢に打ち抜かれたから。

「アーチャーさん…！」

「私が援護する…さつさとそいつを決めてしまえ…！」

かなり（？）いい笑顔で、私を助けてくれたアーチャーさん…なんだか、これの能力を知つててあんな顔してそつな。でも、お陰で有効範囲内に入れた！

「ノリ・メ・タンゲレ
我に触れぬ！」

「な、なんだこれは！？」

管理局の人をマグダラの聖骸布が包み込みます。

これで、マグダラの聖骸布の真の力が發揮します！

「なつ！？なぜバリア・ジャケットが…」

「教えるとおもいますか?...少し、OISHOKIなの」

卷之三

私は、レイジング・ハートを構えていい笑顔（？）で話しかけます。
ふふふ…どうしようかな？

「いくよ、レイジング・ハート！」

「エリス・マスター」

「アーチー、アーチー！」

Side out

Side アーチャー

零距離からの砲撃魔法…しかも、聖骸布で相手の動き・魔法を封じるとは…酷いな。まるで、悪魔のようだ…

「アーチャー……たすがにあれはやり過ぎな気がしますね……」
「ああ……私もフロイトに倒してもいいかと聞いたが、ヒヒआでもする
氣はなかつた……さて、私はこれで逃げさせてもううよ

「ああ。あの子には、私の分までやつてくれてありがとうと言つておいてくれ」

「はい。必ず

俺は、セイバーにそう言こ残してその場を後にした。もちろん、追跡などさせないようつづいて靈体化を行なった。

Side out

Side なのは

ふう、スッキリしたの。

私は、ボロボロになつた時空管理局の引きずりでます。

『ちよ、ちよっとこいかしり?』

「ふえ?」

いきなり、私の田の前にモーターが現れます。

え、え、ええ? ! これって、あせらかに魔法じゃなくて科学だよね! ! ?

『私はその子の上向のコンティ・ハラオウンって言つの。ちよっとお話したいことがあるから、時空船に来てくれるかしり?』

「時空船…ですか?」

ゴーノ君のほうを向いてみると、ゴーノ君は頷いています。そつかこの申し出は受けたほうが良いんだね。

「はい。解りました

うーん…」これが、吉と出るのか凶と出るのかどっちなのかな?

Side our

時の庭園…プレシア・テスタロッサの拠点であるこの場所に、今は

プレシア・テスター^{トロッサ}ともう一人の少女がいた。

その少女は、フェイトと同じくらいの年頃の少女だった。

「あんたが、今回の依頼主か?」

「ええ、そうよ。私が、貴方に依頼をしたプレシア・テスター^{トロッサ}

よ

少女の口調は女子らしくなく、まるで男の子のような口調だった。
金色の髪をなびかせて話す少女は、黒い帽子にワンピースを着た、
まるで童話に出てくる魔法使いのような格好だった。

「そんで、依頼内容はなんなんだ?」

「ええ。私はこれから、数日後にある実験を行なうの。けど、その
じけつけんを行なう間に私の実験を邪魔者が出でくるはずよ。貴方
にはその実験を行なっている間、ガードマンのような仕事をして欲
しいのよ」

「へへつ。なかなか面白そうな依頼じゃないか。いいぜ、やってや
るぜ!」

少女の笑みは、まるで面白ごものを見つけた少年のよつと感える。

「ナウル。その際には、『の』も通れないよつてお願いするわ」

映し出されるのは、一枚の画像。そこにはフロイトの姿が映つていた。

「？なんでなんだ」

「『の』の名前はフロイト・テスターッサ。私の……娘よ。実験中は、危険が伴うから『の』も通してはいけないのよ」

プレシアが、フロイトのことを娘と呼ぶ際少し顔をしかめていた。だが、それも一瞬で、少女にはそれを知られなかつた。

「へえ～。なかなか親バカなんだな」

「親バ…別にどうでもいいわ、そんなこと。でも、本当に貴方は噂の魔導師なのかしら？今の貴方を見ていると、不安に思えるわ」「だ～か～ら～！あたしは、魔導師じやないつて。でも、まかしときな！あたし、アンナ・Ｋ・遠坂の依頼達成率は100%なんだぜ？そんじゃ、依頼日に会おうぜー！あなたの娘さんにもよろしくな！」

そう言つて去つて行くアンナ。一人になつたプレシアは、ある考え方をしていた。

「娘…ね…私の娘は、アリシア一人だけよ」

そう呟いて、アリシア・テスターッサとの過去を思い出している。だが…

一つだけ思い出せないものがあつた。

『いつも一人にさせてごめんね、アリシア。その代わりに、一つだけなんでも好きなことを言つていいのよ』
『本当！？それじゃあね私、……………が欲しいの！』
『えつ、……………！？え、ええ。なんとかして見せるわ』
『うん！約束だよ！』

（えつ……何故？何故、アリシアとの約束を思い出せないの……？）

プレシアは、何度も何度も自身の記憶を辿る。たった一つ、娘であるアリシアとの約束を思い出すために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9796m/>

正義を受け継ぎし者

2011年10月8日00時56分発行